

国立国語研究所学術情報リポジトリ

昭和45年度 国立国語研究所年報

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-06-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/0000001198

昭和 45 年 度

国立国語研究所年報

— 22 —

国立国語研究所

1 9 7 1

刊行のこ と ば

本書は、昭和45年度における研究および事業の経過について述べたものである。

45年度に刊行したものは次の通りである。

中学生の漢字習得に関する研究（報告36）

電子計算機による新聞の語彙調査（Ⅱ）（報告38）

電子計算機による国語研究（Ⅲ）（報告39）

送りがな意識の調査（報告40）

待遇表現の実態（報告41）

動詞・形容詞問題語用例集（資料集7）

現代新聞の漢字調査（中間報告）（資料集8）

国語年鑑（昭和45年版）

昭和46年6月

国立国語研究所長

岩 淵 悦 太 郎

目 次

刊行のことば	
昭和45年度の調査研究のあらまし	1
現代語の文法の研究—文体と文法との関係—	6
全国方言文法の対比研究	8
X線像による調音運動の研究	10
語の意味・用法の記述的研究—動詞・形容詞等—	11
日本言語地図の作成のための研究—作図ならびに検証調査—	12
児童・生徒の漢字使用に関する研究	15
就学前児童の言語能力に関する全国調査	28
言語の表現機能と伝達効果の研究	31
明治時代語の研究—明治初期における漢語の研究—	44
電子計算機による言語処理に関する基礎的研究	50
社会構造と言語の関係についての基礎的研究	54
現代語の表記法に関する研究—新聞語彙調査に伴う 漢字および表記の研究—	67
漢字機能度の研究	72
電子計算機による語彙調査—新聞を資料とする—	73
国語および国語問題に関する情報の収集・整理	76
科学研究費補助金による研究	85
図書の収集と整理	87
庶務報告	88

昭和45年度の調査研究のあらまし

本年度の研究項目および分担は次の通りである。

- | | |
|----------------------------|----------|
| (1) 現代語の文法の研究—文体と文法との関係— | 話しことば研究室 |
| (2) 全国方言文法の対比研究 | 話しことば研究室 |
| (3) X線像による調音運動の研究 | 話しことば研究室 |
| (4) 語の意味・用法の記述的研究 | |
| —動詞・形容詞等— | 書きことば研究室 |
| (5) 日本言語地図作成のための研究 | |
| —作図ならびに検証調査— | 地方言語研究室 |
| (6) 児童・生徒の漢字使用に関する研究 | 国語教育研究室 |
| (7) 就学前児童の言語能力に関する全国調査 | 国語教育研究室 |
| (8) 言語の表現機能と伝達効果の研究 | 言語効果研究室 |
| (9) 明治時代語の研究 | |
| —明治初期における漢語の研究— | 近代語研究室 |
| (10) 電子計算機による言語処理に関する基礎的研究 | 第一資料研究室 |
| (11) 社会構造と言語の関係についての基礎的研究 | 第二資料研究室 |
| (12) 現代語の表記法に関する研究—新聞語彙調査に | |
| 伴う漢字および表記の研究— | 第三資料研究室 |
| (13) 漢字機能度の研究 | 第三資料研究室 |
| (14) 電子計算機による語彙調査 | |
| —新聞を資料とする— | 言語計量調査室 |
| (15) 国語および国語問題に関する情報の収集・整理 | |
- (1) 現代語の文法の研究—文体と文法との関係—……現代日本語の文法現象が文体の形成にどうかかわりあうかという観点から、比喩表現をとりあげた。そして、その成立条件や、言語形式と対比構造の関係などについて考

察するために、文学作品の比喩表現例および辞書の比喩関係箇所をカード化した。また、比喩のめじるし語とその組み合わせを整理する試案を作成した。

- (2) 全国方言文法の対比研究……昭和41年度から3年間にわたっておこなった全国方言の文法についての調査の結果の整理をすすめる一方、44年度から、史的価値のたかい方言の録音とテキスト化を各地の研究者の協力をえつつ、4か年計画ですすすめている。同時に、それら方言の文法についての記述的な研究をおこなっている。
- (3) X線像による調音運動の研究……前年度にひきつづき、日本語の種々の音声の発音に際しての音声器官の運動を、X線映画フィルムによって分析した。
- (4) 語の意味・用法の記述的研究—動詞・形容詞等——語の意味を区別する特徴についての分析・記述を、だいたい本年度で打ち切りにした。また、用例カードをいくつかの観点から整理して『動詞・形容詞問題語用例集』（資料集7）を作成し、刊行した。
- (5) 日本言語地図作成のための研究—作図ならびに検証調査——『日本言語地図』第4集・第5集の編修のための作業を行なった。なお、資料の意味づけのための検証調査を、九州各地および八丈島で行なった。
- (6) 児童・生徒の漢字使用に関する研究……『中学生の漢字習得に関する研究』（報告36）を刊行した。一方、前年度にそれぞれ一部について実施済みの「高校生の漢字使用の習熟の様相を見るための調査」、「高校生の漢字の読み書き調査」の整理を進めた。また、小学校6年生・中学校2年生を対象に、漢字の構造に関する知識および筆順の習慣に関する調査を実施した。
- (7) 就学前児童の言語能力に関する全国調査……本年度は「就学前児童の言語能力に関する全国調査」の報告書をまとめる三年計画の第一年次にあたる。すなわち、昭和42年度に実施した「就学前児童の文字力調査」についての集計・整理を行なうとともに、検証調査、資料の補充を進めながら、

このテーマに関する報告書原稿の執筆に着手した。なお、その作業が一段落した11月に、その中間報告会をひらいた。

- (8) 言語の表現機能と伝達効果の研究……「言語表現における場面の効果の研究」と「文の形成過程にあらわれる伝達機能の発達の研究」とに分かれる。ことしは、後者に集中して調査研究を行なった。まず、昨年し残した自由な場での幼児の話しことばの資料を、「ことばカード」および「カード集」として作成した。ついで、補充調査として、年少児の話しことばの録音、文字化を行なった。これに加えて、これらカードを使って、幼児のことばを構文的・形態的に分析する研究も昨年に継続して行なった。
- (9) 明治時代語の研究—明治初期における漢語の研究—……明治初期の各種の文献に現われた漢語の実態を調査し、現在の漢語と比較対照するために、①漢語研究に関する著書・論文目録の作成、②翻訳小説『欧州奇事花柳春話』および『通俗花柳春話』の総文節索引の作成と分析、③近代語資料の調査などを行なった。
- (10) 電子計算機による言語処理に関する基礎的研究……前年度にひきつづき、漢字かなまじりのデータの処理システムの開発と実験を行なった。今年度は、「品詞の自動認定プログラム」「KWIC(索引)の作成プログラム」を作成し、所期の成果を得た。またプログラム作成の基礎データを得るために、漢字かなまじり文の文字のエントロピー(連続確率)の計算を行ってきたが、2文字連糸・4文字連糸について確率表をまとめた。

昭和43年度から中断していた「話しことば資料の機械処理の研究」を再開し、今年度中に残り作業と分析を完了し、結果を『待遇表現の実態』(報告41)にまとめた。

- (11) 社会構造と言語の関係についての基礎的研究……前年度に引き続き、福島県保原地区および茂庭地区を中心に調査を行なった。前年度実施した面接調査の整理・集計を進めつつ、さらにアンケート調査を実施し、また、各種場面における言語使用の変容について調査をした。社会構造と方言語彙との関係をみるために、親族語彙、特にアニ・アネ、オジ・オバ名称に

重点をおいて、通信調査を実施した。東北・北陸の3地点の親族語について面接調査したほか、方言集から資料を収集した。また、性向語彙について、アンケート調査をした。

- (12) 現代語の表記法に関する研究—新聞語彙調査に伴う漢字および表記の研究—……前年度に引き続き、1紙朝刊前半分用語列表の作成を行ない、これを完成させた。また、1紙1年分の度数表をもとに、中間集計の結果を『現代新聞の漢字調査(中間報告)』(資料集8)として刊行し、さらにいくつかの分析を行なった。また、「文字使用の実態調査」の結果を、『送りがな意識の調査』(報告40)として刊行した。
- (13) 漢字機能度の研究……三年計画で新たに始めた特別研究である。当研究所がこれまでに実施した婦人雑誌、総合雑誌、雑誌九十種の語彙調査、および、現在電子計算機で進めている新聞語彙調査の結果を、漢字を中心にして集大成し、漢字による造語の実態および各語の使用頻度に関する情報を結集する。これによって現代語の中での漢字の機能を各字について数量的にとらえる。今年度は、三種の雑誌語彙調査資料を分野別に整理して総合台帳に記載する作業を行なった。来年度以降は、語彙調査資料の集成とは別に被験者による実験調査を行ない、客観・主観両面から現代における漢字の機能を明らかにしたい。
- (14) 電子計算機による語彙調査—新聞を資料とする—……前年度に引き続き新聞語彙調査の作業を継続し、調査全体の原データの漢テレさん孔作業を完了、それについて長単位処理をほぼ完了した。データの中処理はこの分について進行中である。なお、『電子計算機による新聞の語彙調査(Ⅱ)』(報告38)および『電子計算機による国語研究(Ⅲ)』(報告39)を刊行した。
- (15) 国語および国語問題に関する情報の収集・整理……例年の通り新聞・雑誌・単行本について調査し、『国語年鑑』の資料として整理した。

なお、上記の研究のほかに、以下の研究題目について文部省科学研究費補助金の交付を受けた。

総合研究A 日本語の電子計算機処理のための基礎的研究（代表 岩淵悦太郎）

一船研究B 現代語の形成過程に関する基礎的研究（代表 岩淵悦太郎）

” C 語の情緒的意味の Semantic Differential による研究（代表 西尾寅弥）

本年度の研究組織は次の通りである。（昭和45年4月1日現在）

◇第一研究部 部長 野元 菊雄

話しことば研究室 上村 幸雄（室長） 中村 明 高田 正治

書きことば研究室 西尾 寅弥（室長） 宮島 達夫

地方言語研究室 徳川 宗賢（室長） 本堂 寛 佐藤 亮一

高田 誠

◇第二研究部 部長 芦沢 節

国語教育研究室 村石 昭三（室長） 根本今朝男 天野 清

言語効果研究室 高橋 太郎（室長） 大久保 愛

◇第三研究部 部長 斎賀 秀夫

近代語研究室 飛田 良文（室長） 松井 利彦

◇第四研究部 部長 林 四郎

第一資料研究室 田中 章夫（室長） 南 不二男（外国出張中）

江川 清 中野 洋

第二資料研究室 飯豊 毅一（室長） 渡辺 友左

第三資料研究室 土屋 信一（室長） 野村 雅昭

言語計量調査室 石綿 敏雄（室長） 斎藤 秀紀 村木新次郎

現代語の文法の研究

——文体と文法との関係——

A 目 的

現代日本語の文法現象が、とくに文体の形成にどうかかわりあうか、という観点から、比喩表現をとりあげ、次の項目ごとに分析・考察し、分類・記述する。

- (1) 比喩をあらわすことのできる言語形式には、どんなものがあるか。
- (2) 比喩をあらわしうる言語形式が比喩を実現するための条件としては、なにが考えられるか（比喩表現であると判定するさいには、どんな種類のむずかしさがともなうか）。
- (3) 比喩が実現している場合の言語形式のそれぞれにおいて、どのような対比の関係がどう表現されているか。

B 担 当 者

話しことば研究室の中村明が担当し、衛藤蓉子はその作業を助けた。

C 本年度の作業

- (1) 文学作品（作品選定の規準と結果は『年報21』に示した）から比喩表現の実例を集める作業を続けた。
 - 1) 比喩意識をとまなう用例（規準は『年報21』に示した）を11編の作品（佐藤春夫『田園の憂鬱』・室生犀星『杏っ子』・岡本かの子『母子叙情』・平林たい子『施療室にて』・永井龍男『風ふたたび』・椎名麟三『永遠なる序章』・三島由紀夫『金閣寺』・福永武彦『草の花』・石原慎太郎『太陽の季節』・開高健『裸の王様』・大江健三郎『死者の奢り』）から採集し、カード化した。（前年度からの累計35編）
 - 2) 比喩との関連を感じさせる全用例を5編の作品（島崎藤村『夜明け

前』・徳田秋声『縮図』・内田百閒『実説艸平記』・横光利一『機械』
・安部公房『他人の顔』)から採集し、カード化した。(前年度からの
累計14編)

- (2) Cの(1)の分類・考察の基礎として、語(句)単位での、固定した比喩表現の概要を知るために、『岩波国語辞典』から抽出した、比喩に関係しそうな箇所をカード化した。
- (3) Cの(1)の一部から、比喩のめじるし語(現代語で直喩をあらわす言語形式を構成する語、いわば比喩マーク)をぬきだし、語の意味よりは比喩が実現しうる言語的環境の条件に重点をおいて、整理した。
 - 1) めじるし語どうしが、どういう組合せと順序であらわれるか、を概観できる関係図を作った。
 - 2) 1)の組合せから型を抽出し、検索の便を考えて記号・番号によって整理し、実際の用例をそえた、分類の試案を作った。

D 今後の予定

- (1) 文学作品からの比喩用例を1編分補充し、累計50編で用例採集をいっおうちきる。
- (2) 採集した全用例にあたって、比喩のめじるし語を追加し、その組合せの分類・整理・図表化を整備する。
- (3) Cの(2)を比喩的転換の性格によって分類・整理する。
- (4) Cの(1)のめじるし語なしの用例を検討し、Dの(3)の結果にてらして分類・整理する。
- (5) 境界線上の用例について検討し、Aの(2)を考える。
- (6) 比喩の形式と対比の関係を調べ、Aの(3)を考える。
- (7) 比喩の総合的考察をおこない、用例を言語面の諸条件から類別し、再整理を試みる。

(中村)

全国方言文法の対比研究

A 目的・意義

日本語の方言の文法を、相互に、また、標準語と比較できるかたちで、研究する。そのために、国立国語研究所地方研究員の協力をえて、沖縄をふくむ全国の方言について、統一的な方法による調査をおこなう。研究の重点を、方言の文法現象のうち、文の述語としてもちいられる各種形式の形態論的構造の記述におく。

この研究の目的は方言の文法について、統一的な方法による全国的規模の調査をおこなうことによって、今後の、方言および標準語の文法の各種の研究に必要な基礎資料をえることである。また、えられる資料は、方言地帯における標準語教育を改善するためにやくだつはずである。

なお、この研究は、地方言語研究室が昭和38年からおこなってきた「各地方言の共通語との対照的研究」をひきつぐものである。

B 担当者

話しことば研究室の上村幸雄、高田正治、衛藤蓉子の3名が担当した。また、今年度おこなった諸方言の録音とテキスト化は、つぎのひとびとの協力によるものである。

加治工真市（沖縄浦添高等学校教諭）、本永清（沖縄平良市宮古高等学校教諭）、寺師忠夫（鹿児島県名瀬市元大島実業高等学校長）、田畑英勝（鹿児島県名瀬市大島高等学校教諭）、浅沼良次（東京都八丈町八丈高等学校教諭）、加藤宜彦（東京都八丈町三原中学校教諭）、角谷和代（陶芸家）、山口幸洋、馬瀬良雄（信州大学助教授）、後藤岩雄（秋田県雄勝郡十文字町植田小学校教諭）

C 本年度の経過と今後の予定

本年度はつぎの仕事をおこなった。

(1) 41年度から43年度までの調査の結果の整理

結果の整理は一部を46年度へもちこした。

(2) 補足のための調査

41年度から43年度までの調査を補足するために、八丈島および奄美諸島において、文法の調査と録音資料の採集とをおこなった。補足のための調査は47年度までつづける予定。

(3) 方言の録音とテキストの作成

話しことば研究室では、方言のほろびてゆくなかで、信頼できる、良質の研究資料を今後確保するために、これまでも、方言の録音とテキスト化（音声表記，標準語訳，注つき）とおこなってきたが（『年報20』P. 8，『年報21』P.15 参照），45年度は，前記の人々の協力によって，沖縄，奄美，八丈島，本土の僻他の合計10地点において録音とテキスト化とおこなった。また，44年度に録音，テキスト化をおえたもののうち，つぎの1点を方言録音資料シリーズの続編として印刷した。

(シリーズナンバー)	(方言名)	(編者)
12	沖縄・瀬底島方言	内間直仁

録音とテキスト化の仕事は45年度から48年度までの4年間に，各地の方言研究者の協力をえて合計約50箇所の方言についておこなう予定である。対象とする方言は国語史的な価値の高い僻地（奄美，八丈島など，また内陸部僻地）を主とする。また，その成果は順次，方言録音資料シリーズとして印刷していく予定である。

(上村)

X線像による調音運動の研究

A 目的・意義

標記の研究は、話しことば研究室が継続的におこないたいとかんがえている日本語音声の研究の一部をなすものである。音声の研究は、現代日本語の音声の音韻論上の個々の問題、表現的な個々の特徴、指導法などをあきらかにすることを目的としておこなう。おもに標準語の音声を分析の対象とするが、今後は比較の必要から、方言や外国語の音声、または、病的異常のある音声も対象とすることがありうる。

B 担当者

話しことば研究室の上村幸雄と高田正治の2名が担当した。

C 本年度の作業

本年度も、ひきつづきX線像による調音運動の研究をつづけ、標準語の個々の単音を発する際のX線映画フィルム像の計測とトレース作業とおこなった。また、そのとき発せられた音声について、ソナグラムおよびオシログラムによる分析をおこなった。

D 今後の予定

上の研究は、46年度中におわらせ、47年度から次の研究へうつる予定である。また、上の研究の成果の刊行は、予定よりおくれたが、46年度中におこなう予定である。

(上村)

語の意味・用法の記述的研究

——動詞・形容詞等——

A 目 的

現代語の動詞・形容詞等の意味・用法を、言語作品の中で実際に使われた用例によって分析・記述するのが目的である。

B 担 当 者

動詞は宮島達夫、形容詞は西尾寅弥が分担し、高木翠が全般の作業を助けた。

C 本 年 度 の 作 業

語の意味を区別する特徴についての分析・記述は、本年度でだいたい打ち切りにした。

また、われわれの使用している動詞・形容詞等の用例カードを資料として、いくつかの観点から用例を集めた『動詞・形容詞問題語用例集』（資料集7）を作成し、刊行した。（44年度の年報で、「動詞・形容詞資料集」と呼んで、内容の一部を例示したもの。）

D 今 後 の 予 定

46年度に、「動詞の意味・用法の記述的研究」「形容詞の意味・用法の記述的研究」という形で、この研究の結果をまとめ、刊行する予定である。

(西尾)

日本言語地図作成のための研究

——作図ならびに検証調査——

A 目 的

現代日本語の基盤を地理的に展望し、かつ、日本語の歴史を言語地理学的に考察するために、日本言語地図（全6集、各集とも言語地図50面、参考地図1面）を作成する。

あわせて、日本言語地図に盛られている資料の性格を明らかにするための検証調査を行なう。

B 担 当 者

地図作成については、第一研究部長の野元菊雄，地方言語研究室の徳川宗賢，本堂寛，佐藤亮一，高田誠が共同してあたり，研究補助員白沢宏枝，中野文子が協力した。また，非常勤職員W・A・グロータースほか多くの人々の援助を受けた。

検証調査には，地方言語研究室の徳川，本堂，佐藤，高田が参加し，話しことば研究室の上村幸雄の協力を受けた。

C 本年度の作業

昨年度までの経過は、『年報7』ないし『年報21』について見られたい。

日本言語地図の作図・編修については，第4集編修・刊行のための作業，および第5集（動物・植物に関する名詞などの言語地図50面，参考地図として近代交通図1面を含む）編修のための作業を行なった。第4集の刊行は，『年報21』には昭和45年3月となっているが，実は，都合により6月となった。

検証調査については，昭和45年10月と昭和46年3月との2回，九州地方各地（1地点八丈島を含む，昭和46年2月15日調査）で，次のような調査を行

なった。目標は、10か年の間隔をおいた同一被調査者に対する同一調査の結果の比較である。もし調査結果間に差異が現われた場合には、その場で関係情報を集め、その性格を分析することにした。昭和35年度の「日本語地図作成のための調査」で訪問し、今回ふたたび訪問した地点（地点番号・被調査者氏名・前回の調査者と今回の調査者）は、次の通り。

調査地点	被調査者	調査者
佐賀県東松浦郡玄海町牟形 (7239.24)	寺田 吉治	柴 田一高 田 (S.35) (S.45)
福岡県粕屋郡篠栗町中町 (7322.21)	藤 太熊	上村幸一 佐 藤
大分県西国東郡真玉町大字黒土中村 (7326.41)	佐当伝十郎	野 元一 徳 川
大分県東国東郡国東町安国寺田野 (7326.69)	栗林 森作	糸 井一 徳 川
福岡県八女郡矢部村大字北矢部字飛 (7353.03)	栗原 信吾	上村幸一 本 堂
大分県大野郡大野町大字田中字妙勝庵 (7356.70)	足立 勇	野 元一 本 堂
熊本県阿蘇郡一の宮町大字宮地 (7364.34)	田島 暉記	秋 山一 本 堂
宮崎県東臼杵郡椎葉村大字大河内本郷 (7394.85)	椎葉伝三郎	野 元一 高 田
熊本県球磨郡相馬村大字四浦字初神 (8303.13)	山田 需	上村幸一 高 田
宮崎県東諸県郡國富町本庄字八幡 (8325.03)	井戸川常男	岩 本一 佐 藤
宮崎県宮崎郡田野町甲黒草 (8335.11)	横山 年行	野 元一 佐 藤
(以上昭和45年10月26日～30日調査)		
東京都八丈町中之郷向里 (7659.62)	菊池 豊蔵	柴 田一上村幸
(以上昭和46年2月15日調査)		
長崎県杵岐郡郷ノ浦町里蝸 (7218.26)	山口麻太郎	柴 田一 佐 藤
*長崎県松浦市御厨町駅通り (7238.86)	中山 義一	西 島一 高 田
*長崎県南松浦郡新魚目町立串 (7256.64)	小倉 清	西 島一 高 田
佐賀県東松浦郡浜玉町大字浜崎 (7330.31)	森 正夫	小 野一 佐 藤
長崎県南高来郡国見町多比良馬場 (7361.82)	太田清三郎	柴 田一 徳 川
熊本県上益城郡甲佐町大字上早川字下大谷 (7373.92)	田上 末雄	秋 山一 徳 川
熊本県八代市日奈久竹ノ内町 (7392.33)	西村 政善	秋 山一 徳 川
熊本県天草郡河浦町宮野河内字本郷 (8300.25)	池田 源市	上村幸一 徳 川
宮崎県西諸県郡野尻町大字紙屋東上原 (8324.26)	迫田 勇	岩 本一 本 堂

鹿児島県西之表市西表字小牧(8393.69)

日高 慶慈 上村孝一本 堂

(以上昭和46年3月8日～24日調査)

以上22か所を訪ねたことになるが、*印の2か所では、事情があって調査できなかった。

D 今後の予定

日本語地図の作図・編修の作業は、6集完結まで続ける。その期間中、毎年新しい観点による検証調査を企画し実行する。検証調査全般の詳しい内容および結果については、機会を改めて報告する。

(徳川)

児童・生徒の漢字使用に関する研究

A 目 的

児童・生徒の漢字使用力の様相を明らかにするとともに、漢字使用力の要因を解明して、漢字指導を組織化するための基礎資料を提供する。

B 担 当 者

国語教育研究室の根本今朝男が担当，川又瑠璃子がこれを助けた。なお，臨時補助者が，一部の集計作業を助けた。

また，報告書『中学生の漢字習得に関する研究』（報告36）の刊行のため，その最終原稿の完成，校正などの仕事を行なった。これには，共同研究者であった芦沢節（第二研究部長），中村明（現話しことば研究室員），根本今朝男がそれぞれ分担して当たった。この作業についても川又瑠璃子が終始これを助けた。

C 本年度の作業

『中学生の漢字習得に関する研究』（報告36）を刊行した。一方，前年度に一部調査を実施した「高校生の漢字使用の習熟の様相を見るための調査」および，同じく一部実施の「高校生の漢字の読み書き調査」の結果の整理分析の作業を進めた。

また，本年度の研究の一部として，児童・生徒の漢字の構造に関する知識および筆順の習慣に関する調査を実施した。これについては，整理集計作業の大体が終了した。以下，この調査の概略を中心に報告する。

児童・生徒の漢字の構造に関する知識および筆順の習慣に関する調査

1. この調査のあらまし

この調査は，「児童・生徒の漢字使用に関する研究」の一環として，小学

校6年生，中学校2年生に対して，漢字の構造に関する知識および漢字の筆順の習慣について調査し，その実態を明らかにしようとするものである。調査問題は小・中学校共通にすることによって，発達の様相が見られるようにした。

2. 調査対象

調査の対象とした児童・生徒は小学校6年生70名，中学校2年生151名で，内訳は次のとおりである。

小学校 東京都中野区立A小学校（6年生 2クラス 男子32名，女子38名，計70名）

中学校 東京都北区立A中学校（2年生 2クラス 男子38名，女子38名，計76名）

〃 愛知県名古屋市長B中学校（2年生 2クラス 男子39名，女子36名，計75名）

3. 調査の時期

昭和46年3月（小学校・中学校とも）

4. 調査の内容

調査問題は，大きく分けて問題1～問題5までの5問である。問題1は五つの小問からなり，漢字一字一字の音および訓について識別させる問題である。問題2は漢字2字で表わされる単語を与え，その漢字に音よみ，訓よみの場合のよみを記入させる問題である。問題3は漢字の部首（偏旁冠脚）としての部分の名称についての知識を見るもの。問題4は，文字としては簡単な漢字で，筆順がまぎらわしいと思われる漢字5字を選んで，その正誤ではなく，児童・生徒が実際にどの筆順に従っているか，その実際を見ようとする問題である。問題5は漢和辞典の使用との関連を考へて，漢字の画数をどの程度誤りなく認識しているかを，画数を数える上で，簡単なものから比較的むずかしいもの，とりまぜて10字を選んで調べる問題である。

テスト問題の全部を次に掲げる。

〔テストの問題〕（原文は縦書き）

問題1. つぎの(1)～(5)の漢字のそれぞれのよみについて、そのよみを示したひらがなの部分を、^み音よみは○で、^く訓よみは□でかこんでください。

- (1)水^みすい (2)原^くげんはら (3)星^みせいほし (4)火^くひか (5)車^くくるましゃ

問題2. つぎの漢字(1)～(5)の、訓よみを右がわの()内に、音よみを左がわの()内に書き入れてください。

- (1)年月 { } (2)風車 { } (3)市場 { } (4)春秋 { } (5)姉妹 { }

問題3. つぎの、(1)～(20)の、点線の下に示したものは、いずれも漢字の部分として使われますが、これらには、それぞれ一定のよびかたがあります。例にならって、その名まえを書いてください。

(例) 校……木(きへん)

- (1)家……冫() (2)原……厂() (3)盛……皿()
(4)形……彡() (5)空……宀() (6)底……广()
(7)開……門() (8)体……亻() (9)照……灬()
(10)草……艹() (11)兄……儿() (12)部……阝()
(13)国……口() (14)病……疒() (15)進……辶()
(16)頭……頁() (17)霜……凷() (18)陸……阝()
(19)起……走() (20)匹……匚()

問題4. つぎの(1)～(5)の漢字を書くとき、あなたは、それぞれどのようなじゅんじょで書いていますか。じぶんがふだん書いているじゅんじょの番号をイの中からえらび、その番号を○でかこんでください。

- (1)田 { 1. 丨 冫 田 田田
2. 丨 冫 冫 田田
3. その他 } (2)右 { 1. 一 ナオ 右右
2. ノ ナオ 右右
3. その他 } (3)左 { 1. 一 ナナ 左左
2. ノ ナナ 左左
3. その他 }
(4)必 { 1. 丨 心 心必
2. ノ 必 必必
3. その他 } (5)方 { 1. 丨 ナナ 方
2. 丨 ナナ 方
3. その他 }

問題5. ある漢字を、いくつの動作^{どうさ}で書くかということを、その漢字の画数^{かく}といいまします。つぎの(1)～(10)の漢字の画数は、それぞれいくつでしょうか。例になら

て、書いてください。

(例) 三…… (3画)

- (1)出…… (画) (2)皮…… (画) (3)月…… (画)
 (4)九…… (画) (5)考…… (画) (6)北…… (画)
 (7)世…… (画) (8)進…… (画) (9)殺…… (画)
 (10)糸…… (画)

5. 実施の方法

名古屋のB中学校については、当方から出向いてわれわれが実施した。都内のA小学校とA中学校との両校については、事前の連絡を密にしたうえで、学校側に実施を依頼した。テストはふだんの教室の中で行ない、テスト法としては作業制限法によった。

6. 調査結果の概要

調査結果について、問題ごとに、そのあらましを小・中を対比させながら述べてみる。なお、以下の各表中、男・女・計欄の数字は正答者数を示し、パーセント欄は、調査人数に対する正答者数の百分率を示す。

1) 問題1 音か訓かを指摘させる問題の結果

〔問題 1〕 小学校

		(1) 水		(2) 原		(3) 星		(4) 火		(5) 車	
		○スイ	□みず	□はら	○ゲン	□ほし	○セイ	○カ	□ひ	○シャ	□くるま
A 小 学 校	正答者数	29	29	29	29	28	28	28	28	27	27
	%	90.6	90.6	90.9	90.6	87.5	87.5	87.5	87.5	84.4	84.5
	正答者数	32	32	32	32	31	31	30	30	31	31
	%	84.2	84.2	84.2	84.2	81.6	81.6	78.9	78.9	81.6	81.6
	正答者数	61	61	61	61	59	59	58	58	58	58
	%	87.1	87.1	87.1	87.1	84.3	84.3	82.9	82.9	82.9	82.9

※調査人数 男32人, 女38人, 計70人

以下、各表とも同じ。

〔問題 1〕 中学校

		(1)水		(2)原		(3)星		(4)火		(5)車		
		○スイ	□みず	□はら	○ゲン	□ほし	○セイ	○カ	□ひ	○シャ	□くろのま	
A 中 学 校	男	正答者数	28	28	27	28	27	26	25	25	25	26
		%	73.7	73.7	71.1	73.7	71.7	68.4	65.8	65.8	65.8	68.4
	女	正答者数	34	34	33	33	33	33	33	33	34	34
		%	89.5	89.5	86.8	86.8	86.8	89.8	86.8	86.8	89.5	89.5
	計	正答者数	62	62	60	61	60	59	58	58	59	60
		%	81.6	81.6	78.9	80.3	78.9	77.6	76.3	76.3	77.6	78.9
B 中 学 校	男	正答者数	31	31	29	28	29	29	30	31	29	29
		%	79.5	79.5	74.4	71.8	74.4	74.4	76.9	79.5	74.4	74.4
	女	正答者数	30	30	31	31	31	31	30	30	29	29
		%	83.3	83.3	86.1	86.1	86.1	86.1	83.3	83.3	80.6	80.6
	計	正答者数	61	61	60	59	60	60	60	61	58	58
		%	81.3	81.3	80.0	78.6	80.0	80.0	80.0	81.3	77.3	77.3
中 校 校 計	男	正答者数	59	59	56	56	56	55	55	56	54	55
		%	76.6	76.6	72.7	72.7	72.7	71.4	71.4	72.7	70.1	71.4
	女	正答者数	64	64	64	64	64	64	63	63	63	63
		%	86.5	86.5	86.5	86.5	86.5	86.5	85.1	85.1	85.1	85.1
	計	正答者数	123	123	120	120	120	119	118	119	117	118
		%	81.5	81.5	79.5	79.5	79.5	78.8	78.1	78.8	77.5	78.1

- ※調査人数 ① A中学校 男38人, 女38人, 計76人
 ② B中学校 男39人, 女36人, 計75人
 ③ 中学校計 男77人, 女74人, 合計151人

以下, 各表とも同じ。

問題1については, 地域差, 小6と中2との差とも, ほとんどない。男女差という観点でも, クラスごとに多少の差はあっても, 全体としての差は認められない。そして, この調査結果の限りでは, 中2にくらべて小6の正答率が相対的に高かった。

この問題で, 小・中に共通して見られる現象として, たとえば「水」につ

いて、スイ・みずというように、その音・訓を正確にとらえ得た者は、他の文字についてもほとんど正答しており、反対に、すい・ミズとその音・訓を逆転して答えた者は他の文字についても同様に音・訓を逆に反応しているという傾向が認められた。

2) 問題2 音よみ、訓よみの形をたずねる問題の結果

問題2では、「春秋(シュンシュウ)」という語のよみが小・中とも最もむずかしかったようである。小学校に関しては正答者0、中学校でもその正

〔問題 2〕 小学校・中学校

		(1) 年月		(2) 風車		(3) 市場		(4) 春秋		(5) 姉妹		
		ネンゲツ	としつき	フウシャ	かざぐるま	シジョウ	いちば	シュンシュウ	はるあき	シマイ	あねいもうと	
小学校	男	正答者数 24	22	27	17	21	25	0	27	20	22	
		%	75.0	68.6	84.4	53.1	65.6	78.1	0	84.4	62.5	68.6
	女	正答者数 24	23	30	16	27	27	0	28	27	27	
		%	63.2	60.5	78.9	42.1	71.1	71.1	0	73.7	71.1	71.1
	計	正答者数 48	45	57	33	48	52	0	55	47	49	
		%	68.6	64.3	81.4	47.1	68.6	76.3	0	78.6	58.8	70.0
中学校	男	正答者数 20	19	25	14	22	24	8	20	21	16	
		%	52.6	50.0	65.8	36.8	57.9	63.2	21.2	52.6	55.3	42.1
	女	正答者数 28	29	29	17	25	28	6	30	30	30	
		%	73.7	76.2	76.3	44.7	65.8	73.7	15.8	78.9	78.9	78.9
	計	正答者数 48	48	54	31	47	52	14	50	51	46	
		%	63.2	63.2	71.1	40.8	61.8	68.4	18.4	65.0	67.1	60.5
中学校	男	正答者数 24	28	33	21	30	31	11	30	30	29	
		%	61.5	71.8	84.6	53.8	76.9	79.5	28.2	76.9	76.9	74.4
	女	正答者数 27	30	32	23	27	27	5	31	31	30	
		%	75.0	83.3	88.9	63.9	75.0	75.0	13.9	86.1	86.1	83.3
	計	正答者数 51	58	65	44	57	58	16	61	61	59	
		%	68.0	77.3	86.7	58.7	76.5	77.3	21.3	81.3	81.3	78.7

中 学 校	男	正答者数 44	47	58	35	52	55	19	50	51	45
	%	57.1	61.0	75.3	45.5	67.5	71.4	24.7	64.9	66.2	58.4
女	正答者数	55	59	61	40	52	55	11	61	61	60
	%	74.3	79.7	82.4	54.1	70.3	74.3	14.9	82.4	82.4	81.1
計	正答者数	99	106	119	75	104	110	30	111	112	105
	%	65.6	70.2	78.8	49.7	68.9	72.8	19.9	73.5	74.2	69.5

答率は19.9パーセントと他の語にくらべて飛びはなれて低い数値を示している。これは、「シュンジュウ」という単語にふれることが日常生活上少ないということを反映しているものと思われる。また、問題2では、「ネンゲツ、としつき」と読んでいるのに、訓を左がわに、音を右がわにというように、回答記入の位置が逆になっている者が目立っている。この種の問題の性質上、誤答として扱った。内容として漢語、和語の識別という作業を課したわけであるが、これはややむずかしかったようである。

3) 問題3 部首(偏旁冠脚)のよび名をたずねる問題

問題3の結果は表に示したとおりである。全体として、小学校40.4パーセント、中学校74.6パーセントの出来で、ここでは学年差が大きく物を言っているようである。結果の取扱いでは、「がんだれ、いちだれ」のように、必ずしも伝統的とは言えないとしても、指導の便宜上学校でそのように呼ばれる習慣があると思われる名称は、それを取り入れて正答として扱った。「うかんむり・くさかんむり・もんがまえ・にんべん」など、身近であり、学校の授業の中でも触れることが多いと思われる部首名については小・中とも90パーセントを越える正答率を示しているが、「さんづくり・ひとあし・かくしがまえ・そうにょう」などは、おしなべて10パーセント以下という低い正答率であった。

4) 問題4 筆順をたずねる問題の結果

ここでは、教育漢字で、小学校第1学年配当の漢字「右・左・田」、第2学年配当の漢字「方」、第4学年配当の漢字「必」の5字の筆順の習慣についてたずねた。どの筆順が正しいかは問わなかった。したがって、この回

〔問題 3〕 小学校・中学校

		(1)家… うかんむり	(2)原… いぢんだれ	(3)盛… さら	(4)形… かみかざり	(5)空… あなかんむり	(6)底… かどがまえ	(7)開… かどがまえ	(8)体… にんべん	(9)照… れんが・火	(10)草… くさかんむり
		小学校		正答者数 30	19	6	6	4	14	30	27
男		% 93.6	59.4	18.8	18.8	12.5	43.8	93.6	84.4	31.3	84.4
女		正答者数 33	15	3	2	3	3	35	35	5	36
%		86.8	39.5	7.9	5.3	7.9	7.9	92.1	92.1	13.2	94.7
計		正答者数 63	34	9	8	7	17	65	62	15	63
%		90.0	48.6	12.9	11.4	10.0	24.3	92.6	88.6	21.4	90.0
中学校		正答者数 35	8	4	0	5	1	34	34	7	37
男		% 92.1	21.1	10.5	0	13.2	2.6	89.5	89.5	18.4	97.4
女		正答者数 34	3	3	0	3	1	33	35	4	37
%		89.5	7.9	7.9	0	7.9	2.6	86.8	92.1	10.5	97.4
計		正答者数 69	11	7	0	8	2	67	69	11	74
%		90.8	14.5	9.2	0	10.5	2.6	88.2	90.8	14.5	97.4
中学校		正答者数 33	5	3	0	5	6	34	33	2	37
男		% 84.6	12.8	7.7	0	12.8	15.4	87.2	84.6	5.1	94.9
女		正答者数 34	9	4	5	9	12	36	35	4	36
%		94.4	25.0	11.1	13.9	25.0	33.3	100.0	97.2	11.1	100.0
計		正答者数 67	14	7	5	14	18	70	68	6	73
%		89.3	18.7	9.3	6.7	18.7	24.0	93.3	90.7	8.6	97.3
中学校		正答者数 68	13	7	0	10	7	68	67	9	74
男		% 88.3	16.9	9.1	0	13.0	9.1	88.3	87.0	11.7	96.1
女		正答者数 68	12	7	5	12	13	69	70	8	73
%		91.9	16.2	9.5	6.8	16.2	17.6	93.2	94.6	10.8	98.6
計		正答者数 136	25	14	5	22	20	137	137	17	147
%		90.1	16.6	9.3	3.3	14.6	13.2	90.7	90.7	11.3	97.4

(11) 兄 … ル	(12) 部 … ル	(13) 国 … 口	(14) 病 … ナ	(15) 進 … ニ	(16) 頭 … 真	(17) 霜 … 朝	(18) 陸 … ル	(19) 起 … 走	(20) 匹 … 口
にひとあし んにょう	おおぎと	くにがまえ	やまいだれ	しんにょう しんにょう	おちのかい おちのかい	あめかんむり あめかんむり	こざとへん	そうにょう	かくしがまえ
1 3.1	5 15.6	20 62.5	10 31.3	26 81.3	5 15.6	15 45.9	19 59.4	5 15.6	3 9.4
0 0	3 7.9	24 63.2	7 18.4	35 92.1	2 5.3	24 63.2	14 36.8	1 2.6	3 7.9
1 1.4	8 11.4	44 62.9	17 24.3	61 87.1	7 10.0	39 55.7	33 47.1	6 8.6	6 8.6

0 0	4 10.5	24 63.2	9 23.7	34 89.5	4 10.5	23 60.5	21 55.3	1 2.6	0 0
1 2.6	2 5.3	27 71.1	8 21.1	35 92.1	2 5.3	24 63.2	16 42.1	0 0	0 0
1 1.3	6 7.9	51 67.1	17 22.4	69 90.8	6 7.9	47 61.8	37 48.7	1 1.3	0 0
0 0	3 7.7	31 79.5	10 25.6	32 82.1	6 15.4	19 48.7	11 28.2	1 2.6	0 0
0 0	4 11.1	32 88.9	12 33.3	33 91.7	8 22.2	20 55.6	8 22.2	2 5.6	0 0
0 0	7 7.3	63 84.0	22 29.3	65 86.7	14 18.7	39 52.0	19 25.3	3 4.0	0 0
0 0	7 9.1	55 71.4	19 24.7	65 85.7	10 13.0	42 54.5	32 41.6	2 2.6	0 0
1 1.4	6 8.1	59 79.7	20 27.0	68 91.9	10 13.5	44 59.5	24 32.4	2 2.7	0 0
1 0.7	13 8.6	114 75.5	39 25.8	134 88.7	20 13.2	86 57.0	56 37.1	4 2.6	0 0

〔問題 4〕 小学校・中学校

		(1) 田			(2) 左			(3) 右			
		① 川 田	② 川 田	3 その 他	① 一 左	② 一 左	3 その 他	① 一 右	② 一 右	3 その 他	
小学校	A 男	反応数	21	11	0	17	14	1	23	9	0
		%	65.6	34.4	0	53.1	43.8	3.1	71.9	28.1	0
	女	反応数	26	11	1	30	8	0	29	8	1
		%	68.4	28.9	2.6	78.9	21.1	0	76.3	21.1	2.6
	計	反応数	47	22	1	47	22	1	52	17	1
		%	67.2	31.4	1.4	67.2	31.4	1.4	74.3	24.3	1.4
中学校	A 男	反応数	22	16	0	20	18	0	32	6	0
		%	57.9	42.1	0	52.6	47.4	0	84.2	15.8	0
	女	反応数	31	6	1	20	18	0	30	7	1
		%	81.6	15.8	2.6	52.6	47.4	0	78.9	18.4	2.6
	計	反応数	53	22	1	40	36	0	62	13	1
		%	69.7	28.9	1.3	52.6	47.4	0	81.6	17.1	1.3
中学校	B 男	反応数	24	13	2	31	8	0	32	7	0
		%	61.5	33.3	5.1	79.5	20.5	0	82.1	17.9	0
	女	反応数	25	10	1	22	14	0	30	6	0
		%	69.4	27.8	2.8	61.1	38.9	0	83.3	16.7	0
	計	反応数	49	23	3	53	22	0	62	13	0
		%	65.3	30.7	4.0	70.7	29.3	0	82.7	17.3	0
中学校	計	反応数	46	29	2	51	26	0	64	13	0
		%	59.7	33.8	2.6	66.2	33.8	0	83.1	16.9	0
	女	反応数	56	16	2	42	32	0	60	13	1
		%	75.7	21.6	2.7	56.8	43.2	0	81.1	17.6	1.4
	計	反応数	102	45	4	93	58	0	124	26	1
		%	67.5	29.8	2.6	61.6	38.4	0	82.2	17.2	0.7

1 心 必	(4) 必 ② ノ 必	3 そ の 他	1 ナ 方	(5) 方 ② ナ 方	3 そ の 他
8	15	9	10	22	0
25.0	46.9	28.1	31.3	68.8	0
12	19	7	19	19	0
31.6	50.0	18.4	50.0	50.0	0
20	34	16	29	41	0
28.6	48.6	22.8	41.4	58.6	0

9	18	11	15	23	0
23.7	47.4	28.9	39.5	60.5	0
14	17	7	7	31	0
36.8	44.7	18.4	18.4	81.6	0
23	35	23	22	54	0
30.6	46.1	35.8	28.9	71.1	0
12	20	7	15	24	0
30.8	51.3	18.0	38.5	61.5	0
14	10	12	11	24	1
38.9	27.8	33.3	30.6	66.7	2.8
23	30	29	23	48	1
34.7	40.0	38.7	34.7	64.0	1.3
21	33	18	30	47	0
27.3	49.4	23.4	39.0	61.0	0
28	27	19	18	55	1
37.8	36.5	25.7	24.3	74.3	1.4
49	65	37	48	102	1
32.5	43.0	24.5	31.8	67.5	0.7

※ ○印は正答として扱った筆順を示す。

答の結果からは、「筆順指導の手引き」に示されているところの筆順について知っているかどうかはわからない。なお、一般で筆順がよく問題にされる「右」の字についてみると、「筆順指導の手引き」に示された筆順に反応した者よりも、別の筆順に反応した者の方が多かった。

5) 問題 5 画数をたずねる問題の結果

〔問題 5〕 小学校・中学校

		(1) 出	(2) 皮	(3) 月	(4) 九	(5) 考	(6) 北	(7) 世	(8) 進	(9) 殺	(10) 糸
		5画	5画	4画	2画	6画	5画	5画	11画	10画	6・7画
A 小 学 校	正答者数	28	32	32	27	20	31	15	23	28	23
	%	87.5	100.0	100.0	84.4	62.5	96.9	46.9	71.9	87.5	71.9
	正答者数	34	36	38	34	25	38	15	31	37	32
	%	89.4	94.7	100.0	89.5	65.8	100.0	39.5	81.6	97.4	84.2
計	正答者数	62	68	70	61	45	69	30	54	65	55
	%	88.6	97.1	100.0	87.1	64.3	98.6	42.9	77.1	92.9	78.6

A 中 学 校	正答者数	30	33	36	30	21	34	16	12	34	21
	%	78.9	86.8	94.7	78.9	55.3	89.5	42.1	31.6	89.5	55.3
	正答者数	30	37	37	33	29	36	16	18	37	25
	%	78.9	97.4	97.4	86.8	76.3	94.7	42.1	47.4	97.4	65.8
計	正答者数	60	70	73	63	50	70	32	30	71	46
	%	78.9	92.1	96.1	82.9	65.8	92.1	42.1	39.5	93.4	60.5

B 中 学 校	正答者数	30	37	39	31	23	36	17	18	34	29
	%	76.9	94.9	100.0	79.5	59.0	92.3	43.6	46.2	87.2	74.4
	正答者数	33	34	31	32	24	32	21	23	31	28
	%	91.7	94.4	86.1	88.9	66.7	88.9	58.3	63.9	86.1	77.8
計	正答者数	63	71	70	63	47	68	38	41	65	55
	%	84.0	94.7	93.3	84.0	62.7	90.7	50.7	54.7	86.7	76.0

中 学 校 計	正答者数	60	70	75	61	44	70	33	30	68	51
	%	77.9	90.9	97.4	79.2	57.1	90.9	42.9	39.0	88.3	66.2
	正答者数	63	71	68	65	53	68	37	41	68	53
	%	85.1	95.9	91.9	87.8	71.6	91.9	50.0	55.4	91.9	71.6
計	正答者数	123	141	143	126	97	138	70	71	136	104
	%	81.5	93.4	94.7	83.4	64.2	91.4	46.4	47.0	90.1	68.9

画数に関する知識の調査結果の、全体の正答率は、小学校 82.7 パーセント、中学校 76.1 パーセントであった。この調査の限りでは学年発達が見られない。この場合、中学校がとくに劣っているとは思われないので、対象校とした小学校の漢字指導のほうに、この現象の理由がひそんでいるものと思われる。それはそれとして、画数の識別しやすい漢字と、識別しにくい漢字には一定の傾向が認められる。このテストの場合、正答率の高い順に配列するとつぎのようになる。

(小)	月	北	皮	殺	出	九	進	考	世	糸
	100.0%	98.6	97.1	92.9	88.6	87.1	77.1	64.3	42.9	78.6
(中)	月	皮	北	殺	九	出	考	進	世	糸
	94.7	93.4	91.4	90.1	83.4	81.5	64.2	47.0	46.4	39.1

これを見ると、月→世までの間に多少の出入りはあるが、小・中ともほぼ同傾向を示していることがわかる。なお、「糸」については、辞典類では 6 画として扱っているが、活字体のデザインにひかれたためか、7 画または 8 画としたものがあり、ことに中学生では反応が集中しなかった。

以上、この調査の内容と結果の概略を中心に述べた。ここでは、細かな考察を加えている余裕がないので、結果の一覧表を比較的詳しい形で載せておいた。

なお、この調査の実施に際していろいろとご協力いただいた関係各校の方に心から厚く御礼を申しあげる。

D 今後の予定

「高校生の漢字使用の習熟の様相を見るための調査」および「高校生の漢字の読み書き調査」の結果の集計作業で未完の部分についての処理を進める。また、昭和46年度から、3年計画で開始予定の特別研究「現代児童・生徒の言語能力の動態調査」に移行するが、その一環として漢字使用力の面も明らかにして行きたい。

(根本)

就学前児童の言語能力に関する全国調査

A 目 的

幼児・児童・生徒が言語・文字をどのように習得し、どのように使用するか、またその要因はなにか等を明らかにする言語発達の研究は、国語教育、とくにその教育計画や指導法の確立、改善のために欠くことのできぬ基礎的な仕事として重視されなければならない。本調査は昭和42年度より3か年にわたって実施されたが、本年度は幼児の読み書き能力を中心に整理分析を進めながら、検証補充調査を加えて、このテーマに関する報告書原稿をまとめる。

B 担 当 者

国語教育研究室の村石昭三、天野清の2名が担当し、福田昭子が作業を助けた。さらに検証・補充調査の諸段階で、実験協力園（3園）、検証調査園（2園）それに調査員の協力を得た。

C これまでの作業

昭和42年度 就学前児童の文字力調査——文字力の全国的水準を明らかにするためのひらがなの清音、撥音、濁音・半濁音の読み・書きテスト、拗音、長音、拗長音、促音および助詞「は」「へ」の読みテスト。他に特定幼児の文字調査。

昭和43年度 就学前児童の語彙力調査——基本的な語の理解水準を明らかにするための範疇化、性状語、時間空間語、動詞分化テスト。

昭和44年度 就学前児童の語彙、コミュニケーション能力調査——前年度に続いての目的をもった動詞テストとコミュニケーション能力を文の作成・変換ならびに物語の再生・伝達からみた諸テスト。

D 本年度の作業

1. 検証, 補充調査

昭和42年度に行なった「就学前児童の文字力調査」の検証調査と実験を、東京、宮城、京都の3地点で、約200名の幼児を対象に行ない、一方、特定幼児の文字調査については必要な資料を補充した。

(1) 検証調査——読みの習得水準(A~H)*の各水準を特性づけるために次の5種のテストを実施した。

1. 文字の知覚弁別テスト, 2. 音韻知覚テスト, 3. 文字の読みテスト, 4. 語の読みテスト, 5. 文の読みテスト

*注 すでにプリテストで、読字数は正規分布せず、その定量的分析は不可能であり、平均読字数は意味がないことが確認されている。それ故、読みの水準設定については、定性分析的方法をとり、次の基準で水準が設定された。

水準	清・濁・半濁・撥音	5種の特殊音節
	71文字	
A	0	0
B	1~5	0
C	6~20	0
D	21~59	0
E	(21~59 60~71)	(1~5 0)
F	60~71	1~2
G	60~71	3~4
H	60~71	5

(2) 「特定幼児の文字調査」の補充——室蘭(優美幼稚園), 徳島(内町幼稚園), 富山(富山大教育学部付属幼稚園)の各園で直接、資料の補充をした。

2. 調査結果の集計，整理と報告書原稿の作成

昭和42年度に行なった「就学前児童の文字力調査」および上掲の本年度の検証，補充調査の集計・整理を行ない，報告書原稿の作成に着手した。なお，昭和45年11月7日，東京・銀座ガスホールで「幼児の読み書き能力」と題する研究報告会をひらいて，その中間報告にあてた。（92ページ参照）

E 今後の予定

「就学前児童の言語能力に関する全国調査」の報告書作成の作業は昭和48年度まで続ける。そして，46年度には『幼児の読み書き能力』（仮称）の報告書を刊行し，以下，語彙力，コミュニケーション能力に関する報告を予定している。

（村石）

言語の表現機能と伝達効果の研究

A 目的・意義

この研究は言語の表現機能や伝達効果を、言語そのものとの関連において、とらえようとするものであるが、表現機能や伝達効果と言語の法則性との関連する事項のうち、まず、つぎのⅠとⅡのふたつのテーマをとりあげた。

- Ⅰ 言語表現における場面の効果の研究……場面によって言語表現がどのような変容を示すかを、伝達という観点からしらべ、あわせて、場面の分析および表現の分析を行なうことを目的とする。
- Ⅱ 文の形成過程にあらわれる伝達機能の発達の研究……幼児のコミュニケーション機能の発達は、言語の獲得あるいは言語活動の形式の分化のなかに、さまざまな形であらわれる。言語の表現機能と伝達効果を、幼児の文表現が成立し、文形式が形成されていく過程でとらえようとする。

B 担当者

本年度はⅡの仕事に集中した。高橋太郎（昭和45年9月1日より2年間外国出張・オーストラリア、モナシュ大学）と大久保愛が担当し、鈴木美都代がこの作業をたすけた。

C これまでの経過

Ⅱの研究テーマの経過についてのべる。

幼児の場合、言語行動の能力は、言語使用能力ときわめて密接な関係をもっているので、幼児の使用する言語の分析からはじめることとした。まず、幼児期における一応の到達点（乳児期よりはじまる言語獲得過程の、一応の

到達点)として、4～6歳児の使用する言語の実態を分析することからはじめた。伝達活動の言語的な単位は、(幼児の場合、しばしば、未完成文のなかに伝達の単位を見いだすことができるが) 陳述の完成する文であるとされているので、文の構文論的な分析を主として、その構成要素である単語の形態論的な分析をこれにくわえて、研究をつづけてきた。これまでに、4～6歳児の文型の概観、連体修飾法、補足文、動詞の形態、名詞の格のつかいかた、文末形式の種類などについて分析した。

幼児の言語を具体的に分析するためには、大量の資料を必要とするので、幼児の言語を録音し、それを文字化してカードにする方式をとった。44年度までに、年長児115名、年中児121名、年少児35名、計271名についての録音を文字化して、のべ約35万枚(ことなり約5,000枚)のカードと、それを製本した5種の「ことばカード集」を作成した。さらに43年には、3児(3歳、4歳、5歳)の家庭における自由な場面での発話を録音し、これらを文字化した。

D 本年度の作業

本年度は次の作業を行なった。

- (1) 自由な場面での資料のカード集およびカードの作成。

3児のことばを自然な場面で録音文字化したものを『幼児のことばカード集VI』(200ページ)、および、その分析研究用としてのカード(約15万枚)を印刷した。

- (2) 年少児の資料の補充採集

次の2園の協力を得て、年少児の資料の補充採集を行なった。

東京板橋区、東京自由保育園

東京北区、赤羽台幼稚園

被験者は男24名、女10名、計34名である。

- (3) 文の構成、陳述の文法的分析

昨年度の継続として、「名詞の格の用法」のうち、「に格」「を格」の分

析と、「接続詞の用法」「従属文の形式」の分析を行なった。

(4) 幼児の接続詞の用法

分析を行なったもののうち、「接続詞の用法」の一部をのべる。ここでの調査の対象となった幼児は、年少35名、年中46名、年長は年中児と同じ子どもたちで46名となっている。場面は、調査者と被験者による問答形式で、10分から30分にわたって話し合ったものである。(くわしくは『年報17』参照)

① 幼児の使用する接続詞と使用パーセント

幼児の使用する接続詞の種類と使用パーセントを年長、年中、年少児にわ

	年 長	年 中	年 少
それで	(499) 56.3%	(316) 58.0%	(264) 48.3%
それから	(123) 13.9%	(48) 8.8%	(63) 11.5%
そして	(76) 8.6%	(104) 19.1%	(95) 17.4%
そしたら	(84) 9.5%	(26) 4.8%	(32) 5.9%
だから	(32) 3.6%	(14) 2.6%	(15) 2.7%
だって	(22) 2.5%	(17) 3.1%	(35) 6.4%
けど	(9) 1.0%	(7) 1.3%	(9) 1.6%
(そう) すると	(7) 0.8%	(4) 0.7%	(1) 0.2%
(それ) じゃ	(7) 0.8%	(2) 0.4%	(23) 4.2%
それなら	(2) 0.2%	(1) 0.2%	(5) 0.9%
(それ) でも	(15) 1.7%	(3) 0.6%	(3) 0.5%
そうすれば	(2) 0.2%		
けれど			(1) 0.2%
その他	(8) 0.9%	(3) 0.6%	(1) 0.2%
合 計	(886) 100.0%	(545) 100.0%	(547) 100.0%

けてみると前ページのようになる。(かっこの中は実数)

「それで」が年長，年中，年少を通じて一番よく使用され，ついで年中，年少では「そして」「それから」，年長では「それから」「そしたら」「そして」の順になっている。年長と年中，年少を比較すると，年中，年少では「そして」を多く使っているのに対し，年長はむしろ「それから」が「そして」より多いということが，みられる。また，これら順接の接続詞が多く使われ，「だって」「だけど」「でも」「けれど」などの逆接の形式が少ないことがめだつ。

② 接続詞使用の実態

幼児の接続詞の種類と使用数を①でみたわけであるが，それでは，どのようにこれら接続詞を幼児は使用しているのか，使用の実態をみることにする。幼児の用法を次のように分けて，その実情をみた。

I 発話のはじめ（話頭）

- (1) 間投詞的使用
- (2) 質問者の発話の反復

II 発話中

1 文頭

- (1) 間投詞的使用
- (2) 他の意味に使用
- (3) 一応正しく使用
- (4) その他

2 文中

- (1) 間投詞的使用
- (2) 他の意味に使用
- (3) 一応正しく使用
- (4) その他

3 文末

一番よく使われている「それで」の例をみることにする。年長，年中，年

少からその例をあげる。(以下の文例で、ひらがなは質問者、かたかなは幼児の発話であることを示す。)

I 発話のはじめ(話頭)

1.1 間投詞の使用

質問者の質問に幼児が答える、その話しはじめの部分に「それで」が出る例である。幼児の頭の中には、前の自分の話がのこっていて、その継続と考えているのかもしれないが、一応無意味な使用といえるので間投詞的^(注1)と名づけた。

年長	ほかにどんなことあった? ○ソイデ ガッシュクデ ホリグテクン タチ マクラデ ナンカ シテタ。(白-1男6:0-7) ^(注2)
年中	ほかにもあるでしょ。○ソレデ ゾウノ オスベリニモ ノッタン ダヨ。(赤-女f 4:10-9)
年少	この絵を見ながらお話するのよ。○ソンデネ コレ オドロイチャ ッタノ。(神-場男3:10-14)

1.2 反復

質問者の問いを再び繰り返して、それから答えるもの。無意味なもの。

年長	それで? ○ソイデネー ネチャッタノ、ウサギガ。 (白-k 男5:8-23)
年中	それで? ○ソイデ シマウマガ ワラッタノ。 (赤-h 女5:4-9)
年少	それで? ○ソイデ マタ サイタノ。 (小-佐男4:3-22)

II 発話中

1 文頭

(注1) 「遊びことば」「場つなぎことば」「場ふさぎ」と命名している人もいる。大石初太郎「日常談話の接続詞」言語生活36号による。

(注2) かっこの中には、幼稚園名、幼児名、性別、年齢、幼児ごとのカードナンバーの略称をこの順序で入れたものである。なお、用例中の#印は質問者のあいづちを示す。

幼児も、年長児ともなると、文+文+文……という長い発話をする事ができるようになる。その場合二番目の文以下の文頭が「それで」ではじまるもの。

1. 1 間投詞的使用

年長	楽しいことあった？ ○イロンナ ウチ イツカカラ。 <u>ソイデネ</u> コノ マエカラ キシャガ キュウコウニ ナッタングッテ。 (自-s 男5:9-12)
年中	○ウサギノ トコニ カメサンガ ヤッテ キテ ソレデ キョウウウ シタノヨネ。カケッコノ； <u>ソレデ</u> ウサギサンガ イットウ ハイデシヨ。(赤-f 女4:10-11)
年少	○ヨルン ナッテ ハナビ ミルンダ。 <u>ソイデネー</u> アメン トキモ ヤッタ。(神-寺男4:4-12)

これら間投詞的使用は、話頭の場合にもいえたが、子どもの口ぐせなどもあり無意味なことばである。それは幼児の場合に限らず、成人においても話しことばの場合には多い。

1. 2 「それから」の意のところに使用

接続詞「それで」は、Aのことが原因でBとなるという意味をもち、「それだから」「そういうわけで」というふうに、こういうわけでこうなるという条件、順接的意味をもっている。それを、「それから」という時間的継起を意味する累加の場所に使用しているのである。

年長	○ハジメ ライオンガ イタノ。 <u>ソイデネ</u> ライオン ココニ キテ ～(文の一部を省略した記号) ライオンガネー イッタラネ シマウ マガ タクサン イテ、ライオン ビックリシテ シマウマガ ワラ ッタノネ。(赤-h 女6:4-11)
年中	○オマツリネー ハダグミマデネー イッタノ。 <u>ソイデネー</u> マタ ゴハン タベテ <u>ソイデ</u> カエッタノ。ウチニ； (自-k 男4:8-2)

年少児には、このような誤りの例はみられなかった。それは時間的順序意識が年少児には乏しいからだといえるかもしれない。接続詞の使用数に

において「そして」より「それから」が年中、年少では少なかったが、これに通じるだろう。

1. 3 「そして」の意のところに使用

「そして」と「それから」は、成人でも厳密に区別して使用はしていないように、区別しにくい面がある。「そして」のほうは、「それから」の動的なのと比べると静的で、むしろ時間的経過よりも並置的である。

年長	○アレデネ フネトカ ナンカネ ボク ツクッテンノ。 <u>ソイデ</u> ウカベテ アソンデンノ。(白-b 男6:0-27)
年中	○アタマガ マルクテ ケガ ナイノ。 <u>ソイデネ</u> アシガ ア アッチソ テガ アルノ。(白-t 男5:3-17)
年少	○〜クラウンデサー 𠄎 クラウン オジチャン ツレテ キタ ツレテ イッチ モラウ コト アルヨ。 <u>ソレデ</u> ミルグ ノンダ コト アルヨ。(神-宮男3:8-3)

1. 4 「そしたら」の意のところに使用

原因、理由の意味をのべる「そしたら」の意のところに「それで」を用いて、間に合わせている例である。

年長	○オツキサマノ ハナシ ヤッテ アグタノ。 <u>ソンデ</u> チュマンナ イッテネ オヨイデ ドッカ イッチャッタノ。(白-z 男5:8-12)
年中	○ライオンガ サキネ ハラッパカラ デテ キタノ。 <u>ソイデネ</u> シマウマ イタノ。(赤-n 男5:2-8)

年少にはこのような誤りはこの調査ではみあたらなかった。しかし、「そしたら」は使用数は少ないが使えないわけではない。のちに出る文中の「て、そしたら」の正しい使用は全くなかった。年中では、上にあげたようにあるが、「そして」とまず使用し、「そしたら」と訂正した例があった。この場合、年長、年少には全くこのような例はみられなかった。接続詞「そしたら」の使用は年少ではまだむずかしいが年中からは十分意識して使えるようになってくる、その過程のあらわれではないかと興味深く感じた。次のような例である。

○(ソウスルト)(注1) コレ ナニカ トラエタカラ (キ) テ オッカケテンノ。ソウシテネ ソシタラネ ハンタイニ コッチ オイカケテ (キ) 。

○カメト ウサギガネ 𠮟 ヤマノポリノ キョウソウ シタラネ 𠮟 カメガ カチニ ナッチャッタノ。ソシテネ ソシタラ ウサギ ハヤイカラ ウサギノ ホウガ カッチ ドッチガ カッタノカ ワカンナイ。(自一h女4:7-13)

ついでに、年少で「そしたら」を正しく使用した例が、幼稚な文であるが5例ほどあるので、そのうち3例をあげてみる。他はその幼児の口ぐせだったり、まちがいであったりしたものである。年少では、原因や理由をのべることはまだむずかしいようだ。

○ショイデネ オウチヲネ 「アーッ」ゴハン タベタノ。シヨシタラネ ガラガラーッテ 「ダレダー」ッテ イッタノ。(小一加男4:1-11)

○エントツノ アナガ ハイッテ クルノ。ソシタラ アッチッチッチチ。(小一竹男4:1-10)

○バクタン? バクタンサ。ソシタラ シュグ ニゲチャウモン。(神一高男4:4-8)

1. 5 一応正しく使用する

もちろん正しく使用する場合が多い。

年長	○ハナガ チボンジャッタノ。 <u>ソンデ</u> ミズヲ ヤッテ オヒサマニアテタラ ナオッタノ。(赤一t男6:0-21)
年中	○ソイデネ アノー チュジュメ ネー 𠮟 ウウント ハタラカセテネー 𠮟 ソレカラネ ウン ノリデネ 𠮟 アノ 「カメクツケナサイ」ッテ イッテネ 𠮟 オイチイト オモッテ ナメタ。 <u>ソイデネ</u> オバアサンガ ベロ キッチャッテネ チュジュメノ。(赤一g女4:8-9)
年少	○カザンッテネ 𠮟 ヤマ ヤマノ ドッカカラ バクハツスルノ。 <u>ソレデ</u> カザンッテ イウノ。(小一福男4:2-6)

(注1) このかっこの中は、子どもの発音がききとりにくいのが、どうもこのようにききとれるというもの。

1. 6 その他の意で使用

年長	<p>○オオキイカラ カケンノガ オソカッタダッテ。<u>ソイデ</u>ネ ネズミハ テッチャイカラ チョコチョコ カケテ イッタダッテ。 〔一方、そしての意〕（自-d 女5:11-30）</p> <p>○カメガネー キョウソウ シテ カメハ オソイ オソイノ。<u>ソイデ</u> ウサギガ ネムッテル アイダニ カメガ ヤマーン トコノポッテッテ イットウニ ナッタノ。〔だけど、それなのにの意〕 （自-i 男6:4-17）</p> <p>○ジュット マエネ シンカンセンデンシャナンカ ツクッテタノ。<u>ソンド</u> ヤメチャッテ カイシャニ イッテンノ。〔それを、だけれどの意〕（自-z 男5:8-4）</p>
年中	<p>○テツジंगा ロボットヲ ヤッチュケンノ。<u>ソイデ</u> ショウタロウガ ショジュウキデ ヤルノ。〔一方とも〕（自-h 男5:5-8）</p> <p>○ウシャギガ ハヤイノ。<u>ソイデ</u> カメガ イットウ ナッテ ウシャギガ ココデ ネテンノ。〔それなのに〕（自-k 男4:8-19）</p>

これは数が少ない。年少には例がなかった。年長の最初の例は、「そして」の意でもよいかもしいが、「一方」の意のほうが適切のように思えるし、次と次の例は、反対の意味をあらわす「だけど」を使用するほうが適切なところである。反対の接続詞は使用数も少ないことは前にみた。

2 文中

2. 1 「て、それで」の形式の場合

幼児は、「ので」を使用した従属文（重文）の使用がほとんど出来ないためか（これは研究テーマの一つである「従属文の形式と用法」についての調査結果による）、「て、それで」の形式を使って文を並べる。あるいは、文意識がまだはっきりしていないためか文+文+文を、文ごとに区切らないで、つないで話す傾向がある。特に年長になると、甚だしい。そこで、これからのべる「て、それで」の使用でも、「て」で区切って、一文にしてしまってもよい場合がある。しかし、ここでは、それは問題にしないで、「それで」の用法としてみていくことにする。年少の場合は、「て、それで」の形式は少ない。まだ、このような複雑な文で話せないためであ

る。だから年長で使えるということは一応発達なのであるが、成人の場合を発達の到達点とすると、まだ未熟な文であるといえる。

2. 1・1 間投詞的使用

年長	○ソイデ アト エ カイテ, ソイデネ プールノ エヲ カイテ, エニッキニ カイタンダ。(自-a 男5:8-18)
年中	○コドモタチガ キテ, ソイデネ 「コワイヨー」 ッテ, ニゲテ イ ッチャッタノ。(自-j 女4:7-20)
年少	○コッカラ カゲテ, ソイデ コッカラ シカラレチャッタノ。〔ひかれたの意〕 (小-竹男4:1-8)

年少の例は2例のみ。その文も未熟である。

2. 1・2 「それから」の意で使用

年長	○～オトトイカ イツカネ # アノー オカヤマカラ ナンカ オクutte キテ, ソイデ ミンナ ヨニンデ タベテ, ソイデ オフロニ ハイッテ, ネタノ。(赤-k 女6:2-3)
年中	○ソイデ マタ ゴハン タベテ, ソイデ カエツタノ。ウチニ;(自-k 男4:8-2)
年少	○ガッコウ トオッテ イッテ, ヒダリ マガッテ, ソイデ ヤマテ チェンヲ ノッテ イクノ。(小-金男4:1-7)

2. 1・3 「そして」の意で使用

年長	○オキヤクサン キタラ チュウダツカラ チュウ アゲテ, オカネ ヒャクエンダツカラ クレテ, ソイデネ カエス トキハ オカネ ト エンベツ。(自-e 女5:7-2)
年中	○～オトモダチト イッタノ。ウチノ シドウシャニ ノッテ;ソイデネ パパガ ゴルフ シテ, ソイデ ボクタチハ オハナ ツンダタノ。〔一方とも〕 (赤-t 男5:1-5)
年少	○コレハ クマガ イテ, ソイデネ チイチイーッテ ネズミガ イテ, クマガ ネジュミヲ ミツカッタノ。〔一方とも〕 (神-大男3:11-12)

「それから」と「そして」の区別は、分類してみたが、やはりあいまいである。年少児には、2.1・2, 2.1・3とも用例が少なく2例ずつだった。

2. 1・4 「そしたら」の意で使用

年長	○～カメガ コナイ ウチ ヒトネムリシテ、 <u>ソイデ</u> カメガ ドン ドン オイヌコシテ イッテ、イチバンニ ナッチャッタ。 (白一b男6:0—30)
年中	○ヨウチエンカラ モンデテ デ マスグ イッテ、 <u>ソイデ</u> マガ ッテ、 <u>ソイデ</u> ツイチャウノ。(赤一i女5:3—8)

年少児には、このような使用の誤りは発見できなかった。前にのべた。

2. 1・5 一応正しく使用

ただし、前にものべたが、接続助詞「ので」の使用ができないわけで、これが正しいといえるかどうか疑問であるが、ともかく、「それで」の意で用いたのにはちがいないからあげておく。年少は2例のみ。それも文意があいまいである。

年長	○ネコガ ネズミヲ オイカケテ、 <u>ソイデ</u> トラックガ キテ、 <u>ソイ デ</u> ブツカッチャッタノ。ネコト トラックガ；〔たの、あるいはは たのでの意〕(白一y男6:0—26)
年中	○ソン ナカニ テツジン アシノ マンマ ドカント ハイッテ、 <u>ソイデ</u> ネ 「ガァオガァオ」ッテ ヤッテモ トベナク ナッチャ ッタノ。〔年長と同じ〕(赤一t男5:1—9)
年少	○コレガ オヒサマニ アタッテルカラ アツク ナッテ、 <u>ソレデ</u> カレテンノ。〔年長と同じ〕(小一a女4:0—13)

2. 16 その他

年長	○ <u>ソイデ</u> オセンタク オワッテ カエッテ キテ、オウチニ イッ テ、 <u>ソイデ</u> オジイサンガ ヤマカラ カエッテ キテ ワロウト シタラ アカンボウガ ウマレタノ。(白一o男6:3—8)
年中	○～カワデネ センタク シテ イター オバアサンガ モモガ ナ ガレテ キテ ビックリシテ、 <u>ソイデ</u> オジイサンノ オミヤゲデ モッテ カエッタノ。〔それを、そしてとも〕(赤一1男4:8—8)

年長の例は、「それで」とも「そしたら」とも「一方」ともとれるが、はっきりしないもの。年少にはない。

2. 2 ~ $\left. \begin{array}{l} \text{たら} \\ \text{から} \\ \text{で} \\ \text{他} \end{array} \right\}$, それでの場合

この例は年少児にはみられなかった。年中児にも一例。原因、理由をのべる従属文をつくる接続助詞「たら」「から」をまだ十分活用できないためか。「で」でつなぐ場合は、ここで文を切ってもよいのに、つないでいるのは文意識が乏しいからであろう。

年長	<p>○ハタラケナイカラネ ステラレテネ ソイデ イヌモネ トシ ト ッタカラ ステラレテネ ネコガ <u>キタラ</u>, <u>ソイデ</u> ネコモ ナカ マニ ハイッテ ニワトリモ モウ スグ スープニ ナゲラレテ ャウカラ ニワトリモ ナカマニ ナッタノ。(自-d 女5:11-20)</p> <p>○アノネー タイソウ シテカラネー ゴア アッ ゴアイサツ シテ カラネー タイソウニネ シテネー ソレデ…… ソレデネー オ ヌウギデネ シテカラ モドッテ ソレデ オナマエ ヨンデカラ, ソレデネー コンド ホントカ ヨンデルノ。(赤-o 女6:1-10)</p> <p>○オウチガ ヨンジュウキュウゴウカンデネー, <u>ソレデネ</u> ヨンジュ ウハチゴウカンノ マエ トオッテ サンジュウサンゴウカンノ マエヲ トオッテ クルノ。(赤-f 女5:9-13)</p>
年中	<p>○オヒサマガ <u>アタックラ</u> <u>ソイデ</u> コンナ ナッチャッタノ。 (自-k 男4:8-21)</p>

2. 3 その他の例

語と語の間に用いられる場合のうち、語順のつごうで話頭にいくべきものが文中に入ったものと、間投詞的なものがある。年長、年中にあった。年長の例から。

○ソノ トキ ソレデネ ワルイ ゴワスノ エンバンニ ソノ オトコ
 ノ コト オトウサント ツカマッチャッテ, ソノ トキ マグマノ
 コドモガ イタンダヨネ。〔語順〕 (自-g 女5:11-11)

お父さんのお仕事知ってる? 何してる? ○オバキュウノヤ ソイデネ
 シール ツクッテンノ。〔間投詞的〕 (自-j 女5:7-1)

3 文末

間投詞的用法なのだろうが、「考え中」というニュアンスがある。年少にはなかった。

年長	○～ソレヲネー ソレガネ モシカ ピンピンッテ ナッチネ ウー ント キエチャッタラネ モウ ニドト ウルトラマン タチアガ ラナク ナッチャウ。ソイデ, [考え中] (自-k 男5:8-16)
年中	○～。ソレデ ゴハン タベルトカ ソウ イウノ, デネー ソイデ, [考え中] (自-u 女5:5-9)

これまで「それで」の用例のみをみてきたわけだが、幼児は接続詞を習得したとはいえ、まだ十分に正確な意味で使えないことがわかる。ただし、話しことばにおいては成人も間投詞的使用が多かったり、その人の口ぐせなどもあったりして、「それで」「それから」「そして」などの使用はあいまいである。しかし、「そしたら」の意のところ「それで」「そして」を使うことはほとんどない。幼児にとっては、文と文の関係を並置するのではなく、そうしたらこうなる、あるいはなったという理由とか原因をのべることはまだむずかしいのであろう。それは、接続詞の種類のうち、反対とか理由をのべる「だけど」「でも」「けれど」などの使用数が少ないこととも通じるようだ。ただ、この場合、こういう問題に焦点をあてた調査でないので、このような傾向があるとしかいいえない。今後実験的に調査してみることが必要である。

E 今後の予定

「文の形成過程にあらわれる伝達機能の発達の研究」については、報告書『4～6歳児の文の構造』（仮題）のまとめをめざして、研究をすすめる。

(大久保)

明治時代語の研究

——明治初期における漢語の研究——

A 目的・意義

明治初期は、現代語の源流となった時代であり、日本の近代化が始まった時代である。この近代化にともない、日本語は大きく変化した。中でも、語彙の変化がはげしく、それは漢語にもっとも著しく反映している。そこで、明治初期の各種文献に現われた漢語の実態を調査し、現在の漢語と比較対照する。さらに、大正期にいたるまでの漢語の調査研究を継続することによって、明治以降における漢語、漢字表記の変遷の条件と方向とをきわめ、現代語成立の歴史的背景を明らかにしようとする。

B 担当者

飛田良文・松井利彦が共同して作業にあたり、牧野正子がこれを助けた。

C これまでの経過

近代語研究室では、昭和30年度以降、明治初期の文献を資料とした語彙調査を継続して行ない、その成果については、そのつど年報または報告書に発表してきた（『年報』7～20、および『明治初期の新聞の用語』（報告15）参照）。昭和42年度から「明治初期における漢語の研究」に着手し、明治初期漢語辞書8種の総索引を作成し、現在、『欧州奇事花柳春話』と『通俗花柳春話』との調査を行なっている。

D 本年度の作業

明治初期の漢語研究のため、次の作業を行なった。

- (1) 漢語研究のための目録作成
- (2) 『花柳春話』の語彙表作成と分析

(3) 近代語資料の調査

その成果は、次の通りである。

(1) 漢語研究のための目録作成

本年度は、「国立国語研究所所蔵 明治期刊行書」の目録を作成した。

(1)―1 明治期に刊行された辞書・研究書の目録

(1)―2 明治期に刊行された言語資料（小説・啓蒙書類）の目録

(1)―1 は、分類目録で、(1)―2 は、研究書以外の資料用図書として別置されている「明治文庫」の書名・著者名別五十音順目録である。

(2) 『花柳春話』の語彙表作成と分析

(a) 作業

『欧州奇事花柳春話』（初編一付録、5冊）と『通俗花柳春話』（初編一四編、4冊）のカード点検を行ない、コピー方式で総文節索引を作成した。

(b) 調査

『通俗花柳春話』のカード点検の段階で、読み方のゆれている漢語、現代とは読み方、意味・字順の異なっている漢語に気付いたので、そのうちのいくつかを例示しておく。（ ）内の数字は、編一ページ一行を示す。なお、印刷の都合で、例文の漢字の旧字体・変体がなほ、現行の字体に改めたものがある。

① 読み方のゆれている漢語

〔「いっか」と「いっけ」（一家）〕

〈一家〉

亡父ハ文読人に非ざれど平素に雅客と交際為し早く一家を齋へて妻をも娶り

(1-94-6)

我々が再び会ん日は和君必ず佳人を娶り一家を成て在すらん (2-76-1)

多の年を積て後得べき名誉を一月の中に獲ばやと氣を火急小に伸ても大に屈し終に

一家を成能はず (3-32-11)

クレブランドハ已に老て子なきものから マルツラパースの次の男児を養ふて一家

の事を打任せり (4-190-4)

<一家>

其經費のいと多ハ殆ど侯の一家をも傾く計りに至りしが (3-50-11)

〔「かく」と「きゃく」(客)〕

<客>

已に亥漏下り多くの客ハ集り居たり (4-25-4)

<客>

客の年齢ハ未だ十八を超ざるの少年ハあなれども (1-8-7)

客も主人も稍酔て盃盤狼籍ならんとする時 (2-36-7)

他国の客と語ること半時余りになりつれど (3-124-11)

クレーブランドハ多くの客を招待して其別業に滞留せしめ (4-48-8)

〔「けいしよく」と「けしき」(景色)〕

<景色>

湖上に舟の絶たれば其景色の寂寞なるハ譬ん様もなかりけり (2-42-9)

<景色>

今此景色を見るにつけ希臘の昔時を思へども (1-123-7)

湖上の景色を望けり (3-2-1)

今此愛べき景色を看れども (3-2-1)

未だ見ぬ景色を見し如く画にも画れぬ事柄を言語の末に現せる (4-168-8)

〔「しよじやく」と「しよせき」(書籍)〕

<書籍>

ジャツキハ点火木を取出し松に移して見まはせど大概書籍の類なれば一賊又も耳語

やう (1-86-12)

室内の四方ハ書棚にて幾千と言書籍を積たり (3-97-4)

近頃彼が著せる書籍の世間に行はるゝを此上なき栄誉と思てや (4-65-11)

<書籍>

マルツラバースハ日耳曼にて上帝の有無を論じたる夥多の書籍を読たれど

(1-41-7)

架上に積たる種々の書籍ハ詩もあり文もあり (2-19-3)

夥多の書籍を著して世の得失利害を痛く論じ (4-2-10)

参考<書籍>

小窓の下に坐し書籍を読んで之を知らず (3-116-2)

〔「だんし」と「なんし」(男子)〕

<男子>

男子の二十一歳を以て丁年となす (1-93-8)

<男子>

男子ハ尚坐に在て更に酒を飲み談話を為す (3-110-5)

〔「べつ」と「べち」(別)〕

<別>

マルツラバースハ唯黙頭るのみにして別に回答を為しもせず (1-92-7)

妾ハ固より丐児の身なり別に往べきあてもなく村々里々彷徨ものなり (2-100-5)

己が党派の者を撰しめんと力を尽し昼夜の別なく周旋したりき (4-7-6)

<別>

余汝を捕縛ハ別の絆にハあらねども汝の有る金時器の出所を知んと欲するのみと

(2-134-3)

フローレンスハ傍を見ながら否々別に言たることなしと (3-121-7)

幸ひ産の軽くして別に病もあらざれば (4-171-6)

〔「みょうおん」と「みょういん」(妙音)〕

<妙音>

自ら弾て自ら歌ひ両ながらに妙音を聞ハ (4-15-6)

<妙音>

婦人ハ胡絃を手に執て絃引しめつ撥を当れば錯々琅々として妙音を発し

(2-40-3)

② 現代と読み方のちがう漢語

〔群集〕

堂内の群集大かたならねば終に之を見失ひ (3-90-2)

〔快樂〕

一時の快樂を得るとても今日の喜悅あるなしと (3-68-10)

〔修覆〕

そのしゆふく ものずき たがひ かた かた
其修覆の趣好まで互に語りつ語られつ (4-17-8)

せうたい
〔招待〕

そのせうたい たびかさな いま いなむ ことば
其招待の度重りて今ハ辞退に言詞なく (4-25-1)

そしよく
〔組織〕

しやくわい そしよく いさしき ひとへ うら
社会の組織の卑賤を単に恨み (3-128-10)

だいが
〔大河〕

ニール河ハ世界第一の大河にして (1-129-2)

どうかうじん
〔同行人〕

ラムリの同行人なるバグレーブ夫人に逢ひ (4-156-2)

なんによ
〔男女〕

みみ そばできけ なんによ こゝろ そがことのもと わか
耳を敬聴は男女の声のして其事故ハ判らねど (1-25-6)

げ なんによ じやう こと またゆへ
現に男女の情を異にするハ亦故なきにあらずかし (2-91-9)

きよて なんによ われなき みなあらそ おもて いづ
聴衆の男女ハ吾前にと皆争ふて堂外に出れば (3-87-12)

なんによふたり こ まろ
男女二人の子を挙げしが (4-189-12)

ふうがう
〔富豪〕

ふうがう ものおほ すみ けうしや ふう なす みないとたけ わざ こひ
富豪の者多く住て驕奢の風を為ものから皆絲竹の業を好み (2-108-4)

ふうがう なたりじ くおん
富豪の名当時に冠たり (2-108-12)

ふうゆう
〔富裕〕

かれ けうす み い ふうゆう なる まま
彼が状態を見るに最と富裕なる状態れば (1-105-5)

まいじつ
〔毎日〕

まいじつよ じ ご じ あいだ ちや のみ
毎日四時と五時の間に茶を喫 (2-121-10)

りようがん
〔龍顔〕

りようがんこと きるに
龍顔殊に麗しかりし (3-49-4)

③ 現代と意味のちがう漢語

〔當時〕

たうじ なたるるがうけつ すくひ こひ やうや らん ないらげ
當時有名豪傑に救援を請て漸くに乱を平定 (1-78-1)

ふうがう な たりじ くおん
富豪の名當時に冠たり (2-108-12)

たうじ いざかすだ い あて いき ますめ いへ
當時英国第一の富貴なる家の女と云り (3-119-5)

たうじ な だが ひとびら しやうぎやう ごと
當時有名き紳士の商議場となれるが如く (4-2-6)

〔別業〕

ふうき とものがら このち べつげふ しつら
富貴の属輩ハ此地に別業を営ひて (2-120-12)

ば おいしゆう べつげふ いた ころ さつき なかば
馬鈴州の別業へ到れる頃は五月の中旬 (3-25-11)

参考 なつ はじめ および こきごと いなか べつぎやう ゆき あつさ き
夏の首に及て尽く田舎の別業に往て暑を避く (3-20-3)

クレーブランドハ多くの客を招待して其別業に滞留せしめ (4-48-8)

④ 現代と字順のちがう漢語

〔裕富〕

し じん くわつぱつ いふ までもなく じんご ゆうふうた ことく あへ およ ところ あら
市民の活潑なるハ謂までもなく人戸の裕富他国の敢て及ぶべき所に非ざるなり
マテノヒト

(3-16-4)

(3) 近代語資料の調査

本年度は、大阪大学文学部所蔵の「懷徳堂文庫」の漢籍、「忍頂寺文庫」の江戸・明治小説類の調査を、飛田、松井が行ない、京都大学教養部、天理図書館の明治初期の小説類の調査を松井が行なった。なお、大阪大学では、池上禎造・宮地裕・美濃部重克三氏のお世話になった。京都大学では、渡辺実氏、天理大学では、広浜文雄氏のお世話になった。

E 今後の予定

来年度は、(1)漢語研究に関する著書・論文目録の作成作業を継続し、(2)『花柳春話』の異なり語彙表を作成し、語種構成および漢語の語形・意味・表記についての分析を行ないたいと考えている。

(飛田)

電子計算機による言語処理に関する基礎的研究

A 目的・意義

電子計算機を使って、語彙調査・用字調査、あるいは話しことばの調査などを行なおうとすると、計算機に、ことばや文字を扱わせる上での、さまざまな問題が生じてくる。

現在進行中の語彙調査においては、集計処理・活用形処理は、電子計算機にまかせているが、単位切り、よみがなづけをはじめ、語種・品詞・活用などの各種の情報づけは、すべて人手の作業にたよっている。この研究の当面の目的の一つは、このような作業を、順次機械化して、語彙調査・用字調査の処理システムを向上させていくことにある。しかし、その成果は、国語資料の機械処理に理論的根拠を与え、各種の言語情報処理の進展に役立つものとなる。

また、話しことばについても、実際の発話を記録したデータとともに、言語外の各種条件を電子計算機に記憶させ、言語的な側面ばかりでなく、さまざまな角度から、話しことばを分析することを目ざしている。これは、言語情報の自動分析の方法論を確立していくための基礎的な研究である。

B 担 当 者

この研究は、第一資料研究室の田中章夫・南不二男・江川清・中野洋が担当し、言語計量調査室の石綿敏雄・斎藤秀紀・村木新次郎の協力のもとに進められた。また、第一資料研究室の益子芳江・堀江久美子・紺野雅子が、研究作業を助けた。なお、南不二男は、昭和43年2月28日オーストラリアのモナシュ大学に出張、昭和45年5月23日に帰国した。

C これまでの研究経過

電子計算機の導入以来、大量語彙調査の調査方式の検討・調査システムの開発のほか、「言語単位の自動分割」「漢字データの機械処理法」「構文解析の自動化」「活用形の処理方式」等の研究を行ない、その成果は、『電子計算機による国語研究』(報告31) および『電子計算機による国語研究(Ⅱ)』(報告34) に発表してきた。

また、話しことば資料の処理は、海外出張中の担当者が独力で作業を続けたので、所内での処理は『年報19』に報告した基本ファイル(磁気テープ)の作成までの段階で、中断していた。

以上のほか、昭和43年度・44年度には、文部省の科学研究費(試験研究)による「言語情報処理における漢字処理の実験的研究(研究代表者・林四郎)」として、「漢字一かな(ローマ字)の相互変換システム」の開発や、「漢字かなまじり文のエントロピーの計算」などを続けてきた。

D 本年度の研究

前年度までに進行したシステム設計と、理論的側面(アルゴリズム)の研究の上になつて、本年度は、主として、つぎのシステムの設計と、その実験テストを試みた。

1) 品詞の自動認定システム

これは、電子計算機に、センテンスの中の単語の品詞を認定させるためのプログラム・システムである。現在進行中の新聞の語彙調査では、品詞の認定はすべて人手作業で行なつたが、語彙調査の一貫処理システムを組みあげていくためには、どうしても、この部分の機械処理が必要となる。

本年度中に、一応プログラムが完成し、実験テストも、所期の成果を収めた。

なお、このシステムの完成により、「単位切り」「漢字のよみがなづけ」「品詞認定」「活用形の終止形変換」が、すべて機械化できることになり、

語彙調査データばかりでなく、漢字かなまじり文の一貫的な処理システムの主要部分が、ほぼ完成したことになる。

2) K W I Cシステム

これは、電子計算機に記憶させてある言語資料について、用例（前後の文脈）のついた索引を自動的に作成していくプログラム・システムである。本年度においては、現在進行中の新聞の語彙調査データについて、二種類の K W I Cシステムが作成された。その一つは、文字変換（漢字→かな）機能を内蔵したシステムで、漢字かなまじり文で入力されたデータについて、各語の用例が、全文かな書きで高速度に得られるものである。

他の一つは、紙テープ出力で、見出し語と用例が、一枚ずつのカードの形で得られるシステムである。これは、“漢テレ K W I C”と呼ばれ、見出し語・用例とも、漢字かなまじりの原文通りの形で作成される。このシステムの本格的な実験は、来年度にもちこされている。

一方、昭和43年度から中断していた「話しことば資料の機械処理の研究」は、本年度、残りの作業と分析を、すべて完了し、その中から待遇表現に関する部分を、『待遇表現の実態——松江24時間調査資料から』（報告41）にまとめて報告した。

以上のほか、文部省の科学研究費（総合研究）による「日本語の電子計算機処理のための基礎的研究（研究代表者・岩淵悦太郎）」の一部として、「よみがな方式による、漢字のかな（ローマ字）変換システム」の作成と、「漢字かなまじり文のエントロピーの計算結果のまとめ」などを行なった。

ここに述べた研究成果のうち、品詞の自動認定システムと、かな文字 K W I Cシステムとについては、今年度刊行した『電子計算機による国語研究(Ⅲ)』（報告39）の次の論文に詳細な報告がある。

中野 洋「品詞認定の自動化」

石綿敏雄「新聞語彙調査の用例プログラム“COBOL-KWIC”」

この報告書のことは、別項「電子計算機による語彙調査」のD5に記してあるので、参照されたい。

E 今後の予定

以上述べたように、「単位切り」「読みがなづけ」「活用形処理」「品詞認定」などのシステムが完成したことによって、語彙調査資料をはじめ、漢字かなまじり文の国語資料を機械で処理する場合のデータ作成段階の問題は、一応解決された。しかし、言語データの処理において、もっとも根本的な意味情報の扱いについては、さきに、石綿敏雄「言語の意味と言語情報処理」『電子計算機による国語研究』（報告31）などで、理論的な研究を試みた程度で、実際のシステム設計には、はいていなかった。今後は、意味情報の処理を、実験的に開始する予定である。手始めとして、『分類語彙表』（資料集6）を電子計算機に記憶させるとともに、語句の意味的な連接関係のモデルを作成し、文の生成を実験する計画である。この研究と関連して、電子計算機で日本語の文を出力する場合の、文体決定の問題も、とりあげていく予定である。

また、「漢字KWICシステム」の研究、「かな漢字変換システム」の作成は、本年度にひきつづいて、その完成を目指す。新聞記事20万字分の文字の連続確率について計算結果がまとまったエントロピーの研究は、この成果の上に立って、かな文のエントロピーについて調査していく予定である。

（田中）

社会構造と言語の関係についての基礎的研究

A 目的・意義

言語あるいは言語生活は、社会生活およびそれを規定している社会構造と密接な関係を持っている。その関係を明らかにするための基礎的準備的研究を行なおうとするものである。

比較的単純な構造を持つと思われる農村について、共通語生活と方言生活との交渉・接触の面を重視しつつ、言語およびその用法（の変動）と社会構造および社会生活（の変動）との関係を明らかにすることを目ざしている。

中心の調査地点としては福島県伊達郡保原町地区および福島市郊外の茂庭^{もにわ}地区を選んだ。

B 担当者

飯豊毅一（音韻・文法を中心に言語および言語使用の面）、渡辺友左（語彙および社会構造、ならびに両者の関連の面）が担当し、中島美智子が作業を助けた。

C これまでの経過

昭和40年度に始めたこの調査は、昭和44年度までに次のようなことを行なった。

- (1) 高年層を対象とする、音韻・文法の方言体系の概略の調査と一部の語彙体系（親族語および形容詞・形容動詞）の調査。これについては「福島北部方言の親族語と形容詞の語彙体系——福島北部調査報告Ⅰ」『ことばの研究』（論集3）や『年報19』等にその一部を報告した。なお、この地の方言体系の特質を明らかにするために東北地方・関東地方等の各地についても参照調査を行なった。

- (2) 録音資料による実態調査。話し手の性・年齢・教養等の違いによって使用言語がどのように異なるかを調査するために録音採集を行ない、そのうち8時間分について文字化し、これより採集した約7万枚のカードによって分析を始めた。その一部については『年報』17・18・19・20に報告した。
- (3) 言語使用の意識に関する調査。高年層・中年層・青年層の年代別や性別によって言語使用にどのような違いがあるかをみるために、約220人について面接調査を行なった。
- (4) 社会構造の調査。各種統計表や記録により概観調査を実施した。その一部は『社会構造と言語の関係についての基礎的研究(1) ——親族語彙と社会構造——』(報告32)に報告した。
- (5) 社会構造と、語彙およびその用法の構造との関連の調査。親族語彙について、それが親族組織およびその社会生活における機能とどのような関係にあるかをみようとした。これについては前記の報告書(報告32)および『社会構造と言語の関係についての基礎的研究(2) ——マキ・マケと親族呼称——』(報告35)にその一部を報告した。また、性向についての価値観と性向語彙の意味用法の構造との関連を明らかにしようとし、東京都内の大学生429名について質問紙法による意識調査を実施した。

D 本年度の作業

1 言語および言語使用の調査

1. 1 言語使用の意識に関する面接調査の整理・集計

前年度実施した面接調査(音声・音韻37項目、語彙41項目、文法44項目等)について、調査項目ごとの単純集計をほぼ完了した。被調査者数は次のとおりである。

	20代			40代			60代			総計
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	
保原地区	19	19	38	19	19	38	19	19	38	114
茂庭地区	18	19	37	20	18	38	19	19	38	113

これは地区別・年代別・性別により言語使用にどのような差があるか、言語要素の各分野・各項目の違いに応じて、どのような差があるか等を明らかにしようとしたものである。農家を中心として調査した。

1. 2 アンケート調査の実施

上記の面接調査は農家を中心としたものであるが、調査地区のうち、茂庭地区については、各年代にわたってほぼ全数調査に近いものであり、この地区に居住するごく少数の商店経営者・工員・事務員・公務員等も対象となった。これに対し、保原地区は中学校生徒の父兄である農家の人々を主な被調査者とした。そこで、保原地区全体に対して、農家の言語使用がどのように位置づけられるかをみるために、全職業にわたって、昭和46年3月にアンケート調査を実施した。被調査者数は約550名である。その調査項目は前年度行なった面接調査の中から選んだ。次のとおりである。

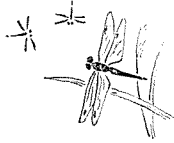
1971. 3

おねがい

国立国語研究所

国立国語研究所のことばの調査に御協力をおねがいます。

a. お名前は		b. 男 女	c. お生れになった年は 明治・大正・昭和 年(才)
d. 住所は			
e. お仕事は	現在	前職 の業	f.



- ①アゲズ ②アゲズボンボ
③トンボ
④その他 ()

1. 04 前足が草を刈るかまに似ている虫で、おこるとそれを振りあげて向かってきます。小さな虫をとらえて食べます。何と言いますか。



- ①エボムシ ②カマキリ
③その他 ()

1. 05 一人で留守番などをし、たいくつして手持ちぶさたのことを何と言いますか。

- ①トゼンダ ②スゲねー ③タイクツダ
④その他 ()

1. 06 そういうとき「トゼンダ」ということばを使いませんか。

- ①言うことがある ②言わないが、きけばわかる
③ぜんぜん知らない ④その他 ()

1. 07 大勢の人の前で話をしろと言われて恥ずかしかったという場合に、「恥ずかしかった」ということは何と言いますか。

- ①ショーシカッタ ②カッコワリガッタ ③ハズカシカッタ
④その他 ()

1. 08 二階から階段を降りて来ることを何と言いますか。

- ①オジデクル ②オッチクル ③オリデクル
④その他 ()

1. 09 近いうちに東京に行く予定をしているとき、その「予定している」ということは何と言いますか。

- ①ヨサンシテイル ②カンジョーシテイル
③ヨテーシテイル ④その他 ()

⑦その他 ()

3. 09 「あいつがおれをたたいた」というとき、「おれを」の部分はどう言いますか。

- ①オレバ ②オレドゴ ③オレントゴ ④オレゴド
⑤オレ ⑥オレオ ⑦その他 ()
-

3. 10 「こっちの山とあっちの山とどちらが高いだろうか」というとき、「高いだろう」の部分はどう言いますか。

- ①タカカンペー ②タケーカンペー ③タケーペー
④タカイペー ⑤タカイタロー ⑥その他 ()
-

3. 11 道で小学校時代の先生に逢って、「いい天気ですね」とあいさつするとき、どう言いますか。

- ①イーテンキダナエ ②イーテンキダナシ ③イーテンキダナン
④イーテンキデスネ ⑤その他 ()
-

3. 12 小学校時代の先生があなたの家に来られたとき「さあ、お上がり下さい」という場合にどう言いますか。

- ①アガラシヨ ②オアガンナンシヨ ③アガッテクランシヨ
④アガッテクナンシヨ ⑤アガラッシャー ⑥オアガリクダサイ
⑦その他 ()
-

3. 13 小学校時代の先生の持っている絵を見て「先生がかいたのですか」という場合に、その「かいたのですか」の部分はどう言いますか。

- ①カイトノカエ ②カイトノカシ ③カカッタノカイ
④カカッタノカシ ⑤カイトノデスカ ⑥オカキニナッタノデスカ
⑦その他 ()
-

3. 14 先生に向かって「何時の汽車に乗るか」とたずねるとき、「ナンシノキシヤニオリイタシマスカ」と言ったら、おかしいと思いませんか。

- ①ことばの使い方としておかしくない

①トテバシャ ②知らない ③その他 ()

4. 07 忙しいときなど、昼飯と夕飯との間に簡単な食事をすることがありますが、何と言いますか。

①コピル ②コピリ ③コジューハン ④オヤツ
⑤その他 ()

4. 08 畑などを耕すことを何と言いますか。

①ウナウ ②シンコー ③タガヤス ④その他 ()

4. 09 田植えをする前に耕した田に水をかけ、一番最初にならすことを何と言いますか。

①アラクレ ②アラカキ ③アラシロ ④知らない
⑤その他 ()

4. 10 昔、麦や豆の実を枝や穂からおとすときふりまわしてたたく棒がありましたが、何と言いますか。

①フリウジバエ ②フリウジポー ③知らない
④その他 ()

4. 11 「プライバシー」ということばをお使いになることがありますか。

①使うことがある ②使わないが聞けばわかる ③聞いたことがない
④その他 ()

1. 3 各種場面における言語使用の変容についての調査

調査した両地区においては共通語を理解できない人は、まず、いない。高年層の一部の人には共通語をほとんど話せないものもいるが、大部分の人は場面に応じて使用言語が方言であったり、共通語に近い言語であったり、その中間であったりする。そこで、どのような場合に、どのような言語を使用しているかを明らかにするために各種場面における言語使用の実際を録音し、分析を行なった。

(1) 両地区における高年層男子1名について次の場面において、どのように使用言語が変容するかを明らかにするために、約1時間ずつ話し合いの状態を録音し、これを文字化して分析することにした。

- i. 友人との雑談 ii. 未知外来者との応対 iii. 会議
iv. 未知高校長との談話 v. 既知年少者（友人の子息）との談話

(2) その他、各年代の男女各1名について、上記 i, ii, における言語使用の状態を録音し、これを文字化して比較資料としたほか、役場・農協等の窓口での応対、各種会議、商店における応対、家庭における談話、個人的用談、仲間うちの雑談等も録音し、参考資料とした。

ただし、これらについての分析は次年度に持ち越された。

2 社会構造と語彙およびその用法との関連について

2.1 親族組織の構造と親族語の意味用法との関連

これまでの調査の継続であるが、今年度は、長男・長女、二男二女以下を意味するアニ・アネ、オジ・オバ名称に重点を置いて、調査をした。アニ・アネ、オジ・オバ名称にあたる福島北部方言の俚言が単語としてどのような意味用法をもっているのかを記述し、各地方言の場合と比較対照する作業をはじめた。そのため、今年度は次のような調査をした。

- ① 通信調査——福島県を除く、東北5県の46地点について通信調査を実施した。
- ② 臨地調査——山形県河北町地方・富山県砺波地方・石川県七尾市地方の方言の親族語について臨地調査をした。
- ③ 方言集から親族語のカード採集——当研究所所蔵のいわゆる「東条カード」には採録されていない各地の方言集・方言辞典のうち15点から親族語をカードに採集した。

以上の調査は、次年度にも継続する。

2.2 性向についての価値観と性向語彙の意味用法の構造との関連

今年度は、前年度に大学生に実施したものと全く同じ内容のアンケート調査を一般社会人に実施した。6月22日現在、男性74名、女性85名、計159名

の皆さんから回答をいただくことができた。男性の平均年齢49.3歳，女性の平均年齢47.7歳。大部分のかたは，前年度に調査した大学生のほぼ親以上の世代にあたる。また，この中には，専門の国語研究者が32名含まれている。調査の集計整理は，前年度の大学生の分と合わせて，現在進行中である。

(飯豊)

現代語の表記法に関する研究

——新聞語彙調査に伴う漢字および表記の研究——

A 目的・意義

国語の正書法を確立するうえに役立つ基礎資料を得るために、国語の文字・表記法に関する諸問題を調査・研究する。

B 担当者

調査研究の担当者は、林四郎（45. 4. 30まで）・土屋信一・野村雅昭の三名であり、武田道子が作業を助けた。

C これまでの経過

国語の文字表記についての諸問題を明らかにするために、これまで二つの方向から調査研究を進めている。一つは文字活動をいとなむ読み手および書き手を対象とした、表記行動に関する調査研究であり、いま一つは、書かれた文字資料を対象とした文字表記の調査研究である。

前者として40年度から、「文字使用の実態調査」を取り上げ、後者として42年度から、「新聞語彙調査に伴う漢字および表記の研究」を取り上げ、調査研究を進めてきた。

「文字使用の実態調査」は、文字活動をいとなむ読み手および書き手を対象として、その表記の実態や、文字・表記に対する意識・態度を調査することを意図している。40年度には送りがな・かな書きの問題を中心に小調査を実施し、41・42年度に学生・社会人合わせて約三千人を対象として送りがな表記に関する意識調査を実施した。引き続き電子計算機を使って集計作業を進め、44年度末までに集計と分析および報告書の原稿の作成のほとんどすべてを完了した。（『年報』18～21参照）

「新聞語彙調査に伴う漢字および表記の研究」は、第一資料研究室と言語

計量調査室が進めている電子計算機による新聞の語彙調査にともない、漢字および表記の研究を行なうものである。語彙調査によって作成されたデータに、機械および人手による処理を施し、各種漢字表、語表記表を作成し、その分析・記述を行なうというのが、そのあらましである。42年度には、電子計算機による、漢字調査の機械処理システムの設計およびプログラムの作成を行なった。そして、43年度から、1紙1年分の長単位データについて機械処理を行ない、45年度に1紙朝刊前半分のデータについて層別漢字表を、44年度に1紙1年分のデータについて層別漢字表を作成し、分析結果の一部を記述した。また、1紙朝刊前半分用語列表の作成にもとりかかった。

D 本年度の作業

I 文字使用の実態調査（完了）

前年度までに完成していた報告書の原稿に、さらに手を加えて完成させ、年度末に、『送りがな意識の調査』（報告40）として刊行した。報告書の原稿作成とは別に、中学生・高校生のみを対象とした分析を行ない、学年と送りがな表記の関係・新聞を読む時間および雑誌を読む程度と送りがな表記との関係について分析した。また、送りがなのゆれの数値化についてこれまで採ってきた方法について再検討し、別の方法による分析を一部試みた。これについては、土屋信一「送りがなの数値化」（『国研LDP』8号）を参照されたい。

II 新聞語彙調査に伴う漢字および表記の研究（継続）

1 漢字に関する研究

(1) 1紙朝刊前半分長単位用語列表の作成

昨年度に引き続いて、朝日新聞朝刊（1～6月）の用語列表の作成を行ない、完了した。これは、手作業によって、個々の漢字が、どのような語を表記するのに用いられ、どのような読み方がされたかを、全体および層別に示したものである。

(2) 中間報告の刊行

前年度に作成した、1紙1年分（全体の約3分の1のデータ量に相当する）の度数表をもとに、中間集計の結果を、『現代新聞の漢字調査（中間報告）』（資料集8）として刊行した。この資料集には、次の3種の表をおさめる。

- 使用率順漢字表
- 層別使用度数順漢字表
- 五十音順漢字表

(3) 全体処理のためのシステム設計

中間集計のための処理システムをもとに、最終集計までの全体の処理システムの検討を行ない、各種プログラムを作成した。中間集計までの処理システムおよびその問題点については『電子計算機による国語研究(Ⅲ)』（報告39）中の下記の論文に述べてある。

野村雅昭「新聞漢字調査の機械処理システム」

(4) 新聞使用漢字の分析

本年度は、中間集計の結果をもとに、新聞使用漢字の量的な分析、および、漢字を用いて表記された語についての実験的な分析を行なった。分析の結果については、下記の論文を参照されたい。

野村雅昭「新聞の漢字と雑誌の漢字」（『国研LDP』6号）

同「固有名詞表記に用いられた漢字」（『国研LDP』8号）

なお、その一部については、6月に行なわれた、「電子計算機による語彙調査」の研究発表会で、「現代新聞の漢字使用の傾向」として発表した。

そのほかに、前記(1)の用語列表にもとづいて、表外漢字（「当用漢字表」に含まれない漢字）の使用傾向を調べた結果を、参考として、次に示す。

朝日新聞朝刊前半（1月～6月）には、延べ202,480字の漢字が出現し、その異なり字数は、2,423字であった。また、そのうち、表外漢字は、650字であった。表外漢字のうち、使用度数の大きいもの（使用度数9以上）115字について、それが固有名詞を表記するのに用いられた割合、および、広告欄に出現した回数を調べた結果は、次のとおりである。

	異なり 字 数	延べ字数	固有名詞 以外の使 用度数	固有名詞 の使用度 数	広告欄以 外の使用 度数	広告欄の 使用度数
補正案追加候補 漢字	12	266	136	130	163	103
人名用漢字	34	1,106	71	1,035	750	356
一船表外漢字	69	1,192	757	1,235	1,009	983
計	115	3,364	964 (28.7)	2,400 (71.3)	1,922 (57.1)	1,442 (42.9)

(計の欄の () 内の数字は、パーセント)

ちなみに、同じ1紙朝刊前半分の、使用度数順上位100字の漢字が固有名詞表記に用いられた割合は、14.0パーセントである。また、1紙1年分で出現した漢字のうち、広告欄に出現した漢字の比率は、35.6パーセントである。

2 表記に関する研究

表記に関する研究は、主として語表記の研究を目的としている。そのためには、語表記が一覧できる表を作る必要がある。その準備的段階として、まず出典台帳カードの作成に取りかかった。これはサンプリングしたデータのブロックごとに、新聞またはその縮刷版を切り抜きあるいは複写してカード化するものである。磁気テープにはいつている語彙調査のデータを機械で処理し、さらに、この出典台帳と対照させて情報を補い、語表記一覧表を作成するというのが、作業の大よその流れである。本年度は、年度末までに1紙1年分の出典台帳を作成した。また、機械処理システムについても検討し、大よその流れを考えた。

E 今後の予定

1 漢字に関する研究

全体の度数集計のための機械処理および全体の用語例のアウトプットを行なう。また、用語例表作成のための、人手による分析作業にとりかかる。

2 表記に関する研究

出典台帳カードは46年度前半に完成させる予定である。引き続き、機械処理システムの設計およびプログラミングに取りかかり、1紙1年分の短単位語表記台帳（磁気テープ）を作成し、その一部（かな書き語・まぜ書き語など）を取り出し、出典台帳カードを使って語表記一覧表を作成する予定である。さらに、全体の語表記一覧表を作成するための機械処理システムの設計にはいる予定である。

（土屋）

漢字機能度の研究

A 目的・意義

漢字の一字一字が、現代語の中で、単語または造語要素としてどのように働いているかを、書きことば資料について大量に調べ、その中で特に問題をはらんだ字について社会各層の被験者を求めて、用字の効果を実験調査して、現代語における漢字の機能を明らかにする。

B 担当者

第四研究部長林四郎と第三資料研究室の土屋信一、野村雅昭が担当し、小林信子が協力した。

C 本年度の作業

三年計画の第一年次に当たり、書きことば資料についての調査を行なった。国立国語研究所がこれまでに実施した雑誌（婦人雑誌、総合雑誌、雑誌九十種）の語彙調査の結果を、漢字を中心にして集成する作業にかかり、本年のうちに、2,600余字、延べ約10万語を整理用紙に転記した。

D 今後の予定

雑誌の語彙調査資料に、現在言語計量調査室を中心にして進行している新聞語彙調査の結果を加えて、資料を集大成するとともに、実験調査を行なって、漢字の機能を評定するための、別の面からの根拠を求める。

(林)

電子計算機による語彙調査

——新聞を資料とする——

A 目 的

婦人雑誌，総合雑誌，雑誌九十種と続けてきた現代語の用語の実態調査を，カードによる人為作業から電子計算機による自動処理に移して，データの処理量をふやし，語彙調査の結果を今日的課題の解決に役立つようにすることを目的とする。現代の新聞につき三百万語の標本をとり，語彙の実態を明らかにしようとする調査研究である。

B 担 当 者

言語計量調査室の石綿敏雄，斎藤秀紀，村木新次郎および第一資料研究室の田中章夫，南不二男（45. 5. 23 帰国），江川清，中野洋がこれに当たり，言語計量調査室の花井夕起子，小高京子，沢村都喜江，下山いくよ，安藤陽子，第一資料研究室の益子芳江，堀江久美子，紺野雅子が研究作業を助けた。計算機の保守のかたわらプログラム作成相談に日立電子サービスの田口昇氏の協力があつた。

C これまでの経過

昭和41年1月から12月までの新聞三紙（朝日・毎日・読売）一年分を対象とする語彙調査は，昭和41年から作業にとりかかり，42年末までに，サンプリング作業，計算機にかけるための前処理作業および長単位処理プログラムの作成をほぼ完了し，1紙朝刊半年分について，テスト・ランを実施した。漢字テレタイプによる原データのさん孔作業と，それを入力して長単位関係の磁気テープ上の各種ファイルを作成するオペレートとは，昭和42年末までに，全体量の3分の1を終了した。昭和42年度には，短単位処理のプログラムの設計にとりかかり，昭和44年度にその機械処理を完了した。同年度末に

は、全工程の3分の1に当たる、長単位68万、短単位94万の処理を終えた段階における長短両単位の出現頻度表を報告書（報告37）として刊行した。（長単位、短単位等の用語については同報告書を参照のこと。）

D 本年度の研究作業

本年度の研究作業のおもなものは次の通りである。

1. 漢字テレタイプによる原データのさん孔

漢字テレタイプによる原データのさん孔は、今回の調査の全データについて、本年度内にその作業を完了した。

2. 長単位処理

漢字テレタイプによる原データのさん孔が完了したので、これについて長単位機械処理プログラムをオペレートし、全データを機械のなかに入れ、中処理のためのアウトプットを完了した。長単位二百万語のファイルの全整理の一部をすませたが、一部は46年度の作業にまわした。

3. データの中処理

長単位処理がすんだ分について1紙1年分の出力単位について漢字に読みがなをつけ、語種・品詞などの情報をつけて再入力する。これを中処理という。

本年度はさらに1紙分を完了し、残りの1紙分について作業中である。

4. 類別語彙表報告書作成

昨年度作成した類別語彙表の機械処理出力分につき、本年度に『電子計算機による新聞の語彙調査(Ⅱ)』（報告38）を刊行した。内容は次の通りである。

調査の概要 調査の目的と内容 調査の方法

語彙量の分析 語種別の語彙量 品詞別の語彙量 語種と品詞

度数順外来語表

品詞別度数順短単位表 動詞の表 サ変動詞として使われた名詞の表 形

容詞の表 形容動詞語幹の表 副詞の表 助動詞の表 助詞の表 接辞

の表

五十音順索引

同音短単位表

同形短単位表

5. 電子計算機による国語研究の報告書作成

用語調査の方法、プログラムの作成、結果の分析などにつき、『電子計算機による国語研究(Ⅲ)』(報告39)を刊行した。この報告書は、別項に記した「電子計算機による言語処理に関する基礎的研究」にかかわるもののほか、語彙調査の報告として、次のものを含んでいる。

林四郎「語彙調査と基本語彙」

斎藤秀紀「電子計算機による語彙調査Ⅱ——主として短単位処理について」

田中章夫「新聞語彙調査の同音語と同形語」

なお、今年度処理した2紙1年分の長単位処理プログラムの一部については、同報告書中の石綿敏雄「新聞用語調査の用例印字プログラム“COBOL—KWIC”」中に説明がある。

E 今後の予定

46年度中に長単位ファイルをまとめ、中処理作業とその結果の漢テレさん孔作業を継続し、短単位機械処理を行ない、47年度に結果をまとめ、全体の語彙表を内容とする報告書を刊行する。

(石綿)

国語および国語問題に関する情報の収集・整理

国語に関する学問の一般を知り、あわせて学界の動向や世論の動きをとらえるために、前年度に引き続き、本年度も、昭和45年1月から12月までの刊行の図書・雑誌・新聞について文献調査を行なった。これらの文献目録は、その他の資料・情報とともに、当研究所編『国語年鑑』（昭和46年版）に掲載されている。

以下、そのおのおのについて分類し、冊数および点数により、大まかな傾向を示すことにする。（ ）内に前年の数を示し、今年のものと比較できるようにした。

なお、今年から外国発行の刊行図書・雑誌も調査対象とした。ただし、採録範囲は、日本語の研究および日本語教育に関するものに限定した。

この調査および国語年鑑に関する作業は、次のものが担当した。

伊藤菊子 田原圭子 中曽根仁

I 刊行書の調査

国語関係の刊行書について、書名・著（編）者名・発行所・発行年月・型・ページ数、ならびに内容を調べてカード化した。当研究所で入手できなかったものについては、「納本週報」（国立国会図書館）、その他の目録から情報を補い、総数 647 冊についての分類目録を作成した。

刊行書の分類と、その冊数

国 語 (学)		語 彙 ・ 用 語	
国語一般	12 (21)	語彙・用語	24 (13)
国語史	29 (16)	人名・地名	5 (3)
音 声 ・ 音 韻	6 (6)	文 法	11 (5)
文 字 ・ 表 記	20 (11)	文 章 ・ 文 体	4 (8)

方言・民俗	71 (56)
コミュニケーション	
コミュニケーション一般	8 (1)
言語技術(話し方・書き方)	38 (21)
情報処理	4 (4)
マス・コミュニケーション	5 (3)
国語国字問題	2 (3)
国語教育	
国語教育一般	12 (7)
学習指導一般	34 (21)
ことばの指導一般	3 (2)
語彙・文字教育	2 (18)
文法教育	0 (0)
聞く・話す	0 (0)
読む・読書指導	7 (12)
書く・作文指導	4 (14)
文学教育	4 (4)
幼児教育(幼児の言語)	7 (4)
特殊教育	6 (2)
学力調査	1 (1)
国語教科書・その他	5 (3)
日本語の研究と教育	4 (10)
言語学その他	51 (32)

辞典・用語集	
国語辞典	5 (5)
用語辞典・用語集	15 (9)
特殊辞典	9 (10)
索引	9 (9)
資料	
資料	17 (18)
史料	12 (2)
解題・目録	9 (11)
年鑑	15 (14)
計	470 (379) 冊

追補	
国語学その他	18 (3)
音声・音韻	0 (3)
文字・表記	9 (1)
語彙・文法	14 (4)
方言・民俗	37 (9)
コミュニケーション	17 (9)
国語問題	2 (1)
国語教育	19 (4)
日本語の研究と教育	3 (0)
言語学その他	22 (11)
辞典・索引・資料	36 (6)
総計	647 (430) 冊

II 雑誌論文の調査

当研究所購入の諸雑誌，ならびに寄贈された大学や学会・研究所などの刊行物から，関係論文・記事を調査し，題目・筆署名・誌名・巻号数・発行年月およびページ数などを記載したカードを作り，分類別カード目録を作成した。当研究所で入手できなかったものについては，「雑誌記事索引」(国立国会図書館)の人文・社会編および科学技術編，「LLBA」(Language and Language behavior abstracts)，その他の目録類からできる限り情報を補った。採録した論文・記事の総数は，2,797点に達した。(連載物などについては，各回ごとに1点と数えることはせず，その題目について1点と数えた。)

1 一般刊行雑誌，および大学・研究所等の紀要・報告類の種別数(目録類から採録した分は含まない。)

a 一般刊行雑誌(学会誌も含む)……329(267)種

国語・国文・言語ほか	120(112)	週刊誌・総合誌	2(1)
方言・民俗	10(13)	文芸・詩歌・芸能	6(6)
国語問題	4(3)	その他(教育・社会学・心理学ほか)	72(73)
国語教育	31(21)	臨時にはいった雑誌	19(11)
マス・コミ関係	12(15)	外国誌	42
外国語	11(12)		

b 大学・研究所等の紀要・報告類……211(202)種

2 論文・記事の分類とその点数

国語(学)	141(86)	音声・音韻一般	22(29)
時評・随筆	52(52)	史的研究	26(14)
国語史		アクセント・イントネーション	10(14)
国語史一般	32(48)	文字・表記	1(0)
訓点資料関係	15(13)	文字・字体	14(30)
音声・音韻		表記	42(48)
		語彙・用語	

語彙・用語一般	91 (21)
古語	41 (46)
現代語	16 (27)
新語・流行語	9 (11)
外来語	14 (1)
人名・地名(命名)	13 (8)
辞書・索引	10 (20)
文法	
文法上の諸問題(現代語法)	149(159)
史的研究	43 (72)
敬語法	15 (13)
文章・文体	
文章・表現一般	66(144)
史的研究	97 (65)
古典の注釈	
注釈一般	9 (4)
上古	6 (9)
中古	15 (17)
中世	5 (8)
近世以降	13 (9)
方言・民俗	
方言一般	15 (33)
各地の方言	
東部	28 (27)
西部	29 (19)
九州・沖縄	18 (17)
民俗	2 (6)

コミュニケーション	
コミュニケーション一般	25 (11)
言語生活	25 (25)
言語活動	
言語活動一般	2 (7)
書く・読む	39 (34)
話す・聞く	20 (6)
情報処理	42 (27)

マス・コミュニケーション	
一般的問題	2 (14)
新聞	7 (4)
放送	25 (16)
広告・宣伝	2 (3)
印刷・出版	4 (5)

国語問題	
国語問題一般	85 (42)
(うち、音訓・送りかな改定案 に対する意見 42)	
表記法	15 (11)
当用漢字など	6 (4)

国語教育	
国語教育一般	34 (52)
言語能力の発達	9 (9)
国語教育史	14 (11)
学習指導一般	59 (69)
ことばの教育一般	36 (13)
文字・表記教育	10 (15)
ローマ字教育	3 (1)

語彙教育	6 (1)		
文法教育	35 (71)		
聞く・話す	28 (3)		
読む・書く			
読む・書く一般	59 (30)		
読解指導	42 (34)		
読書指導	32 (15)		
作文教育	121 (80)		
文学教育	37 (23)		
古典教育	11 (5)		
漢文教育	2 (4)		
特殊教育	14 (8)		
学力評価	5 (7)		
国語教科書・教材研究	37 (32)		
日本語の研究と教育	50 (20)		
言 語 学			
言語一般	104 (63)		
意 味	7 (11)		
比較研究	10 (7)		
翻訳の問題	14 (7)		
外国語研究	58 (10)		
外国語教育 (学習)	18 (27)		
各国の言語問題	12 (13)		
資 料			
資料一般	2 (2)		
国語資料	13 (14)		
翻 刻	21 (14)		
目 録	3 (4)		
		書 評 ・ 紹 介	
		国語 (学) その他	26 (23)
		音声・音韻	7 (1)
		文字・表記	7 (2)
		語彙・文法	23 (13)
		辞書・索引	0 (1)
		文章・文体	12 (17)
		方言・民俗	15 (6)
		国語問題	3 (1)
		国語教育	17 (9)
		日本語の研究と教育	0 (7)
		言語 (学) その他	27 (15)
		<u>計</u>	<u>2,401 (2,049) 点</u>
		追 補	
		国語 (学) その他	19 (21)
		国語史	17 (7)
		音声・音韻	16 (11)
		文字・表記	25 (9)
		語彙・用語	42 (18)
		文 法	15 (10)
		文章・文体	41 (10)
		注 釈	15 (0)
		方 言	28 (17)
		コミュニケーション	20 (6)
		国語問題	6 (6)
		国語教育	72 (20)
		日本語の研究と教育	4 (7)
		言語 (学) その他	76 (47)
		<u>総計</u>	<u>2,797 (2,238) 点</u>

なお、今年は *Linguistic Bibliography for the Year* (Permanent International Committee of Linguistics) の1939～1966年版から「海外における日本語研究」の文献目録を採録し、分類別カード目録397枚を作成した。詳細は、『国語年鑑』46年版に掲載した。

III 新聞記事の調査

下記の諸新聞から、関係記事を切り抜いた。各月ごとに整理・整本し、資料として保存し、閲覧に供している。

切り抜き点数は2,584点で、その内訳は次のとおりである。

1 新聞の種類と切り抜き点数

日・夕刊紙		西日本	309(473)
朝日 (大阪)*	505(570) (2)(15)	週刊・その他	
毎日	314(198)	日本読書新聞	29(14)
読売 (大阪)*	303(274) (5)(6)	週刊読書人	76(51)
東京	217(425)	図書新聞	29(28)
サンケイ	412(111)	新聞協会報	32(21)
日本経済	147(126)	教育学術新聞	17(5)
北海道	151(68)	その他	36(33)
		計	2,584(2,468)

* (大阪) は、各紙の大阪版であって、山田房一氏から、関係記事のあるごとに送られたものである。

2 月別の切り抜き点数

1月	203(189)	2月	233(196)	3月	256(206)
4月	182(226)	5月	211(233)	6月	195(226)
7月	243(170)	8月	172(186)	9月	215(206)
10月	224(227)	11月	236(206)	12月	214(197)

3 新聞記事の分類とその点数

国語(学)一般	215(158)	言語活動	
音声・音韻	24(19)	言語活動一般	1(7)
文字		話すこと(聞くこと)	38(25)
文字・表記	16(11)	書くこと(読むこと)	26(13)
活字	11(1)	読書	44(14)
語彙		ことばと機械	33(26)
語彙一般	194(452)	国語問題	
各種用語	45(23)	国語問題一般	90(41)
新語・流行語・隠語	97(52)	表記の問題	
外国語・外来語	56(43)	表記一般	18(18)
辞書	53(31)	当用漢字など	36(106)
問題語・命名	146(60)	かなづかい	5(2)
人名・地名	245(320)	送りかな	5(3)
文法	12(16)	かな書き	6(11)
文体		横書き・縦書き	4(2)
文体・表現	34(22)	人名・地名の表記	14(3)
方言		外来語表記	9(9)
方言一般	7(27)	ローマ字	6(1)
方言と標準語	4(6)	国語教育	
各地の方言	59(372)	国語教育一般	69(16)
言語生活		学習指導の問題	
言語生活一般	108(49)	学習指導一般	16(4)
ことばの問題	41(22)	話す(聞く)	2(4)
ことばづかいの問題	25(16)	読む(読書指導)	27(19)
敬語の問題	24(29)	書く(作文指導)	7(9)
		文学・古典教育	2(3)
		特殊教育	13(15)

視聴覚教育	6 (0)	日本語の研究と教育	51 (30)	
ローマ字教育	0 (1)			
学力テスト	5 (0)	マス・コミュニケーション		
幼児語教育	65 (14)	マス・コミ一般	38 (21)	
言語学		新聞	13 (10)	
	言語一般	57 (49)	放送	40 (43)
	外国語一般	10 (7)	宣伝・広告	34 (13)
	比較研究	21 (9)	出版	108 (38)
	翻訳の問題	43 (27)	書評・紹介ほか	109 (77)
	外国語教育	68 (32)	計 2,584 (2,468) 点	
	外国語に関する紹介ほか	29 (18)		

今年も昨年に引き続き、ことばに関する連載記事が多かった(くわしくは、『国語年鑑』<46年版>に掲載)。分類項目の中で、例年に比して、きわだって記事が多かったのは、「幼児語教育」だった。これは、中央教育審議会での5歳児就学問題や、当研究所の「幼児の言語能力に関する全国調査」の中間発表などの影響からか、この方面の解説記事や投書記事などが多かったためである。また、「言語生活一般」の記事も多かった。これは、公衆電話の3分制や、お話し中でもかかる電話、その他電話に関する新しい話題が多かったためである。

〔付〕 所外からの質問について

昭和45年度に電話で受けた質問件数を月別に示すと次のとおりである。

月 計	45年	45年	45年	45年	45年	45年	45年	45年	45年	45年	46年	46年	46年
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
847	65	53	100	83	75	70	89	59	43	57	81	72	

質問の内容は例年どおり、多方面にわたっていた。用字用語について163件と件数が多いのも例年どおりだった。このなかでは、基準・規準、対象・

対照，伸展・進展，生長・成長，精算・清算などの同音類義語の使い分けに
関しての質問が48件と多いのも変わらないことだった。漢字の読み101件
（姓名に関する読みが36件），字体に関して51件（例えば，吉・吉，塚・
塚など），語源に関して42件（ヘドロ5件をふくむ）。送りがな41件，かな
づかい40件，そのほか，敬語の使いかた，当用漢字，文法，研究所および研
究所の刊行物についての照会など，例年のとおり質問の多いものだった。電
話の質問のほかには，はがき・封書による質問が22通，直接研究所に来所さ
れ質問した人が15人ほどあった。

以上の質問件数は，すべて質問の係を通ったもので，研究員が直接個人的
に受けた質問は含んでいない。

（田原，中曽根）

科学研究費補助金による研究

日本語の電子計算機処理のための基礎的研究（代表 岩淵悦太郎）（総合研究 A）

<研究目的>

電子計算機の普及と情報化社会の進展により、言語を電子計算機で取り扱う、いわゆる言語情報処理が実用化されるようになり、より高度な処理法の研究開発も行なわれるようになってきている。その基礎の一つとして、言語の基本単位である文の処理があり、これが言語情報処理の研究開発の重要な問題点になっている。この研究は、この文の処理法の開発を目的としている。

<実施計画の概要>

上記の目的を達成するために、言語の構造を計算言語学の立場から分析し、①計算可能な文法規則の系をつくること、②文を取り扱うアルゴリズム（計算手順）を開発してプログラム化すること、③人間の言語行動をシミュレートし、学習機能をプログラムに付与する研究をすすめることが必要である。本年度には、①新聞、文学作品などについて用例つき用語総索引をつくり、分析データを作った。また、そのデータについて名詞と動詞の結合規則を研究した。②活用形のアクセプタのアルゴリズムを開発し、構文分析の研究を行なった。③人間の言語活動を発達過程からとらえるための行動の観察と研究資料の作成を行なった。

現代語の形成過程に関する基礎的研究（代表 岩淵悦太郎）（一般研究 B）

<研究目的>

明治・大正・昭和の 100 年間における日本語の実態を巨視的にとらえ現代語の形成過程に関する次の問題点を明らかにする。

1. 和語・漢語・外来語の消長
2. 語表記の推移
3. 漢字含有率の変遷

＜実施計画の概要＞

明治10年を基点として、10年間隔で東京日日新聞の1日分を対象に、その紙面（朝刊）の全数調査を行なった（ただし、広告は除いた）。その1日には、明治10, 20, 30, 40, 大正6, 昭和2, 12, 22, 32, 42年の各年の11月10日を選定したが、1日分の語彙量が、年によって異なるので、ほぼ1万語になるよう、明治10, 20, 30, 昭和22年は、11月10日に連続する日を加えた。全延べ語数、約15万枚のカードを採集し、これに、語種、欄名、品詞、固有名詞、所在（面一段一行）の情報を記入し、総索引を作成中である。索引の完成しだい、上記の項目について分析の行なう予定である。

図書の収集と整理

前年度にひきつづき、研究所の調査研究活動に必要な研究文献および言語資料を収集、整理し、利用に供した。

また、例年のとおり、各方面から多くの寄贈を受けた。寄贈者各位の御好意に対して感謝する。

昭和45年度に受け入れた図書および逐次刊行物の数は、次のとおりである。

図 書

受 入	2,776冊				
	購 入	寄 贈	製本雑誌	その他**	計
和 書	1,101	466*	770	212	2,549
洋 書	135	23	67	2	227
計	1,236	489	837	214	2,776

* 上甲幹一氏寄贈を含む。

** 数量更生受入等。

逐次刊行物（学術雑誌，紀要，年報類）

継続受入	538種		
	購 入	寄 贈	計
和	55*	441	496
洋	29	13	42
計	84	454	538

* 新聞（8種）を含む。

（大塚）

庶務報告

I 庁舎および経費

1 庁舎

所在	東京都北区西が丘3丁目9番14号		
敷地			10,030 m^2
建物			
本館	鉄筋コンクリート二階建	(延)	1,576 m^2
図書館	鉄筋コンクリート平屋建書庫積層	(延)	213 m^2
電子計算機室	鉄筋コンクリート平屋建		118 m^2
その他付属建物		(延)	1,452 m^2
計			3,359 m^2

2 経費

昭和45年度予算総額		177,681,000円
人件費		101,792,000円
事業費		73,894,000円
各所修繕		1,995,000円
昭和45年度文部省科学研究費補助金総額		6,180,000円
総合研究(A)		3,000,000円
一船研究(B)		2,680,000円
“ (C)		500,000円

II 評議員会 (昭和46年3月31日現在)

会長 久松 潜一 (45.1.13 会長就任)	副会長 * 有光 次郎 (46.3.2 副会長就任)	
阿部 吉雄	石井 良助	* 江尻 進

遠藤 嘉基	*尾高 邦雄	高津 春繁
*佐伯 梅友	佐々木八郎	沢田 慶輔
千葉雄次郎	*永井 健三	*中村 光夫
西尾 実	西脇順三郎	*前田 義徳
*松方 三郎	山本 有三	*渡辺 茂

*印は46. 2. 4 再任。

III 組織と職員

1 定員 74名

2 組織および職員（昭和46年3月31日現在）

	職名	氏名	備考	
国立国語研究所 第一研究部 話しことば研究室	所長	岩淵悦太郎		
	部長	野元 菊雄	46. 2. 19～46. 3. 30 外国出張 (ハワイ)	
	室長	上村 幸雄		
		中村 明		
		高田 正治		
		衛藤 蓉子		
	書きことば研究室	室長	西尾 寅弥	
		宮島 達夫		
		高木 翠		
		田原 圭子		
地方言語研究室	室長	徳川 宗賢		
		本堂 寛		
		佐藤 亮一		
		高田 誠		
		白沢 宏枝		
		中野 文子	46. 3. 31 退職	
		非常勤	W. A. グロータース	

	職名	氏名	備考
第二研究部	部長	芦沢 節	45.4.1 昇任 45.10.5~46.1.4 第四研究部長事務代理
	室長	村石 昭三	45.4.1 昇任
言語効果研究室		根本今朝男	
		天野 清	
		川又瑠璃子	
		福田 昭子	
		小林 信子	
	非常勤室長	岡本 奎六	45.9.1 主任研究官になる。外国出張(オーストラリア・ニュージーランド)
	室長(併)	高橋 太郎	45.9.1 言語効果研究室長に併任
		芦沢 節	
		大久保 愛	
		鈴木美都代	
第三研究部	部長	齋賀 秀夫	46.2.19~46.3.30 第一研究部長事務代理
	室長	飛田 良文	
近代語研究室		松井 利彦	
		牧野 正子	
		中曾根 仁	
		林 四郎	45.10.5~46.1.4 文部省在外研究員(ワシントン, ボストン)
第四研究部	部長	田中 章夫	
	室長	南 不二男	休職(外国出張のため 45.2.28~45.5.31)
		江川 清	
		中野 洋	
		益子 芳江	
		堀江久美子	
		紺野 雅子	
第二資料研究室	室長	飯豊 毅一	
		渡辺 友左	
		中島美智子	46.3.31 退職

	職 名	氏 名	備 考
		伊藤 菊子	
第三資料研究室	室長(併)	林 四郎	45. 5. 1 第三資料研究室長併任解除
	室 長	土屋 信一	45. 5. 1 昇任
		野村 雅昭	
		武田 道子	45. 4. 1 採用
言語計量調査室	室 長	石綿 敏雄	
		斎藤 秀紀	
		村木新次郎	45. 4. 1 採用
		花井夕起子	
		小高 京子	
		沢村都喜江	
		下山いくよ	
		安藤 陽子	45. 4. 1 採用
庶 務 部	部 長	的場 益雄	
庶 務 課	課 長	鈴木 元彦	45. 4. 10 東京医科歯科大学に転出
	課 長	酒井 睦夫	45. 4. 10 文化庁から転入
	課長補佐	伊藤 仲二	46. 3. 31 退職
		西山 博	
		岡本 まち	
		根岸佐代子	
		田島 正幸	
会 計 課	課 長	根岸 達躬	
	課長補佐	渋谷 正則	45. 6. 25 東京外国語大学に転出
	課長補佐	山本 昌志	45. 7. 1 国立西洋美術館から転入
		鈴木 亨	
		筒井 士郎	45. 7. 1 東京教育大学に転出
		中村 佐仲	
		南 弘一	45. 5. 1 東京医科歯科大学から 転入

	職 名	氏 名	備 考
図 書 館		加藤 雅子	
		金田 とよ	
		船倉 正章	46. 3. 31 退職
		安藤信太郎	
		木村 権治	
		岩田 茂男	
	館 長	(欠)	
		大塚 通子 大浪由紀夫	

IV 研究発表会

1. 電子計算機による語彙調査 (来会者約 150 名)

日 時 昭和45年6月1日(月)午後1時30分～4時30分

場 所 岩波ホール

あいさつ	所 長	岩淵悦太郎
語彙調査データの自動処理法	第一資料研究室長	田中 章夫
品詞認定の自動化	研究員	中野 洋
現代新聞の漢字使用の傾向	研究員	野村 雅昭
語彙調査と情報処理	言語計量調査室長	石綿 敏雄
質疑応答 司会	第四研究部長	林 四郎

2. 幼児の読み書き能力 (来会者約 250 名)

日 時 昭和45年11月7日(土)午後1時30分～4時30分

場 所 銀座ガスホール

あいさつ	所 長	岩淵悦太郎
幼児はどれだけ読み書きできるか	研究員	天野 清
かたかな・漢字をおぼえるまで	国語教育研究室長	村石 昭三
幼稚園における文字の扱い	”	”

幼児の読み書き調査から
一調査に参加して一

亀戸幼稚園長
九段幼稚園

山内 昭道
原田 愛子

V 外国人研究員および内地留学生の受け入れ

1. 外国人研究員

氏名・職名	研究題目	研究期間
カール・ヴ・ティター ハーバード大学言語学 科教授 (アメリカ)	日本語の方言に関し、図 書館の資料利用のため	昭和44. 6. 1から 昭和45. 8. 31まで
イルジー・ネウストウプニ ヴイクトリア州立モナ ジュ大学日本学部教授 (オーストラリア)	日本語を中心とする日本 文化の国際的理解	昭和45. 1. 10から 昭和45. 5. 31まで
アニック・ローラン フランス文部省派遣学 生 (フランス)	日本語の情報処理の研究	昭和46. 1. 26から 昭和46. 9. 30まで
ユッタ・キューナスト 国際キリスト教大学研 究生 (西ドイツ)	商業広告における日本語 (特に新聞、雑誌などに おける) の研究	昭和46. 1. 27から 昭和46. 9. 30まで

2. 内地留学生

氏名	勤務・職名	研究題目	研究期間
福渡 淑子	日本ソフトウェア株 式会社準社員	日本語の語彙文法 論的研究	昭和44. 9. 1から 昭和46. 3. 31まで
板東 武	徳島県鳴門市第一中 学校教諭	国語科における基 本的技能の指導は どのようにすれば よいか、特に文学 作品の指導はどの ようにすればよ いか	昭和45. 4. 11から 昭和45. 10. 15まで
田中 瑞穂	茨城県勝田市立市毛 小学校教諭	国語科における効 果的な読書指導	昭和45. 4. 13から 昭和45. 7. 10まで
高平 嘉明	杉並第一小学校教諭	児童言語発達につ いての研修をおさ め言語障害指導の 諸問題の解決の資	昭和45. 7. 16から 昭和46. 3. 31まで

		とする		
浜崎久美子	〃	〃	〃	〃
石倉 有子	〃	〃	〃	〃
大津 精	茨城県真壁郡真壁町 真壁小学校教諭	指導過程の実証的 研究	昭和45. 10. 1から 昭和45. 12. 24まで	
樺島 忠夫	京都府立大学文学部 助教授	コンピュータによ る言語処理につい て	昭和45. 10. 1から 昭和46. 2. 28まで	
高田 明	富山郡新川郡入善町 外二町組合立舟見中 学校教諭	中学生の言語能力 の実態に関する調 査方法——新学習 指導要領への移行, 新教育課程の編成 の基礎調査——	昭和45. 10. 1から 昭和45. 10. 31まで	
高橋 勝吾	説明的文章の読解力 を高める工夫	新潟県村上市立岩 船小学校教諭	昭和45. 10. 12から 昭和45. 10. 16まで	
渡辺 憲義	〃	〃	〃	

VI 日 記 抄

1970. 5. 2 東京都電気試験所計測部長佐藤慶三郎氏ほか5名見学
5. 29 文化庁附属機関庶務会計部課長会議（京都国立博物館）
6. 1 国立国語研究所研究発表会（岩波ホール）
6. 4～5 第29回文部省所轄ならびに国立大学附置研究所長会議（日本都市セ
ンター）
6. 5 文部省所轄研究所長会議（東京）
6. 6 第22回文部省所管研究所事務長会議（国立西洋美術館）
6. 18 同志社大学英語英文学研究室岡田妙氏見学
6. 26 長野県南佐久郡甲組小・中学校教頭会甘利賢一氏ほか11名見学
7. 2 国際キリスト教大学日本語科金井英雄ほか7名見学
7. 7 鹿児島県教育センター国語研究主事亀井秀隆氏見学
7. 8 第73回国立国語研究所評議員会
議事

1. 昭和45年度事業計画について
 2. 研究所整備計画について
 3. 昭和46年度概算要求について
 4. その他
8. 8 梅光女学院大学短大講師白木進氏見学
9. 9 フランスグルノーブル大学教授機械翻訳研究センター所長B. Vau-
quois 氏ほか2名見学
- 9.10 東京教育大学助教授松本昭氏ほか7名見学
- 9.29 パリ大学大学院のエコール・プラチックの学務部長リガロフ教授,
ビビアヌ・アルトン夫人, マエス教授見学
- 9.30 第21回文部省所轄機関事務協議会(大雪青年の家)
- 10.28 東京都立杉並ろう学校阿部春治ほか14名見学
11. 3 職員リクリエーション(長瀬方面)
11. 7 国立国語研究所研究発表会(銀座ガスホール)
- 11.10~11 文部省所轄研究所長会議(奈良)
- 11.11 東京都立墨田川高等学校坂井教諭ほか生徒23名見学
12. 8 第74回国立国語研究所評議員会
議事
1. 昭和46年度研究事業中間報告
 2. 昭和46年度概算要求について
 3. 研究所整備計画について
 4. その他
- 12.16 二松学舎方言研究会久保田芳男ほか19名見学
- 12.19 創立記念行事 記念講演・講師西脇順三郎氏(研究所で)
1971. 1.22 日米科学協力国際セミナー事業の一環として同セミナー出席者ブリ
ンスレン大学キアマン教授ほか16名見学
2. 2 スエーデン言語学者B・イエルヌット氏見学
- 2.10 スエーデン大学院スタファン・ヤンソン氏見学
- 2.17 東京教育大学国府台分校内地留学生菊地氏ほか10名見学

- 2.22 岐阜県教育センター田口参吾氏見学
- 2.26 オーストラリア・モナシュ大学教授マルク・ブリュネー氏見学
3. 2 第75回国立国語研究所評議員会
議事
1. 副会長互選
 2. 昭和46年度予算内示について
 3. 庁舎新営について
 4. その他
3. 9 各省直轄研究所長連絡協議会昭和45年度定例総会（都道府県会館）
- 3.22 文化庁附属機関長会議（国立教育会館）

昭和46年8月

国立国語研究所

東京都北区西が丘3-9-14
電話東京(900)3111(代表)

UDC	058	495.6
NDC		810.5

本書の市販品発行所
東京都新宿区市ケ谷加賀町2の30 (260)5281
株式会社 秀英出版

国立国語研究所刊行書一覽

国立国語研究所報告

1	八丈島の言語調査	秀英出版刊	品切れ
2	言語生活の実態 ——白河市および付近の農村における——	”	”
3	現代語の助詞・助動詞 ——用法と実例——	”	700円
4	婦人雑誌の用語 ——現代語の語彙調査——	”	500円
5	地域社会の言語生活 ——鶴岡における実態調査——	”	600円
6	少年と新聞 ——小学生・中学生の新聞への接近と理解——	”	品切れ
7	入門期の言語能力	”	200円
8	談話語の実態	”	品切れ
9	読みの実験的研究 ——音読にあらわれた読みあやまりの分析——	”	”
10	低学年の読み書き能力	”	”
11	敬語と敬語意識	”	”
12	総合雑誌の用語(前編) ——現代語の語彙調査——	”	”
13	総合雑誌の用語(後編) ——現代語の語彙調査——	”	”
14	中学年の読み書き能力	”	400円
15	明治初期の新聞の用語	”	”
16	日本方言の記述的研究	明治書院刊	品切れ
17	高学年の読み書き能力	秀英出版刊	”
18	話しことばの文型(1) ——対話資料による研究——	”	800円
19	総合雑誌の用字	”	80円
20	同音語の研究	”	550円
21	現代雑誌九十種の用語用字(1) ——総記および語彙表——	”	1,000円
22	現代雑誌九十種の用語用字(2) ——漢字表——	”	1,000円

23	話しことばの文型 (2) —独話資料による研究—	"	550円
24	横組の字形に関する研究	"	350円
25	現代雑誌九十種の用語用字 (3) —分析—	"	1,000円
26	小学生の言語能力の発達	明治図書刊	2,100円
27	共通語化の過程 —北海道における親子三代のことば—	秀英出版刊	750円
28	類義語の研究	"	750円
29	戦後の国民各層の文字生活	"	400円
30-1	日本語地図 (1)	大蔵省印刷局刊	品切れ
30-2	日本語地図 (2)	"	"
30-3	日本語地図 (3)	"	8,000円
30-4	日本語地図 (4)	"	8,000円
31	電子計算機による国語研究	秀英出版刊	450円
32	社会構造と言語の関係についての基礎的研究(1) —親族語彙と社会構造—	"	250円
33	家庭における子どものコミュニケーション意識	"	350円
34	電子計算機による国語研究(Ⅱ) —新聞の用語用字調査の処理組織—	"	450円
35	社会構造と言語の関係についての基礎的研究(2) —マキ・マケと親族呼称—	"	450円
36	中学生の漢字習得に関する研究	"	5,000円
37	電子計算機による新聞の語彙調査	"	1,300円
38	電子計算機による新聞の語彙調査(Ⅱ)	"	2,800円
39	電子計算機による国語研究(Ⅲ)	"	700円
40	送りがな意識の調査	"	1,500円
41	待遇表現の実態 —松江24時間調査資料から—	"	900円

国立国語研究所資料集

1	国語関係刊行書目(昭和17~24年)	秀英出版刊	品切れ
2	語彙調査 —現代新聞用語の一例—	"	"
3	送り仮名法資料集	"	"

4	明治以降国語学関係刊行書目	秀英出版刊	300円
5	沖繩語辞典	大蔵省印刷局刊	3,000円
6	分類語彙表	秀英出版刊	1,100円
7	動詞・形容詞問題語用例集	〃	1,700円
8	現代新聞の漢字調査(中間報告)	〃	500円

国立国語研究所論集

1	ことばの研究	秀英出版刊	品切れ
2	ことばの研究 第2集	〃	750円
3	ことばの研究 第3集	〃	800円

国立国語研究所年報 秀英出版刊

1	昭和24年度	品切れ	12	昭和35年度	350円
2	昭和25年度	〃	13	昭和36年度	160円
3	昭和26年度	160円	14	昭和37年度	220円
4	昭和27年度	品切れ	15	昭和38年度	250円
5	昭和28年度	240円	16	昭和39年度	250円
6	昭和29年度	200円	17	昭和40年度	250円
7	昭和30年度	品切れ	18	昭和41年度	300円
8	昭和31年度	220円	19	昭和42年度	300円
9	昭和32年度	200円	20	昭和43年度	350円
10	昭和33年度	品切れ	21	昭和44年度	400円
11	昭和34年度	220円			

国語年鑑 秀英出版刊

昭和29年版	450円	昭和34年版	品切れ
昭和30年版	600円	昭和35年版	550円
昭和31年版	品切れ	昭和36年版	800円
昭和32年版	〃	昭和37年版	品切れ
昭和33年版	〃	昭和38年版	950円

昭和 39 年版	品切れ	昭和 43 年版	1,200円
昭和 40 年版	1,100円	昭和 44 年版	1,500円
昭和 41 年版	1,100円	昭和 45 年版	1,500円
昭和 42 年版	1,100円	昭和 46 年版	2,000円

高 校 生 と 新 聞	国立国語研究所 日本新聞協会 共編	秀英出版刊	280円
青年とマス・コミュニケーション	日本新聞協会 国立国語研究所 共著	金沢書店刊	品切れ

1970—1971

ANNUAL REPORT OF THE NATIONAL
LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE

CONTENTS

Foreword

Outline of Research Projects from April 1970 to March 1971

Study of Modern Japanese Grammar

Contrastive Study of Dialect Grammars

Cineradiographic Study of Articulatory Movements

Research on Meaning and Use of Verbs and Adjectives

Compiling and Publishing the Linguistic Atlas of Japan

Study on the Use of Chinese Characters by Pupils of Primary
School, Middle School and High School

National Survey on Pre-School Children's Language Power

Study on the Expressional Function and the Communication Effect
of Japanese

Study on the Language of the Meizi Period

Analytic Study of Language Data by Computer

Basic Study on the Relation between Language and Social
Structure

Study on the Writing System of Modern Japanese

Research on Chinese Characters in Modern Japanese

Statistical Investigation of Newspaper Vocabulary

Others

General Affairs

THE NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE
9-14, NISIGAOKA 3-TYOME, KITA-KU, TOKYO